

Hitotsubashi
Quarterly

Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア

堀光亀

Captains

連載企画

杉山学長
退任にあたっての
メッセージ

西條文雪氏

《特集》
地球の風 地域の風
西條産業株式会社
代表取締役

湯川真人氏

《特集》
関根敏博氏
大学院博士課程で学ぶ
蜷川幸雄演劇集団の役者

飯島満氏

《My choice》
詩吟のプロ吟詠家

《特集》
「三商ゼミ」の今

《特集》
60年の伝統を学生たちが守る

松本正義氏

《対談》
日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？
住友電気工業株式会社社長
社団法人如水会理事長

山内新学長からの
メッセージ
新任者メッセージ



135th Anniversary
80 years in Kunitachi

新学長からのメッセージ

一橋大学長／山内 進

新任者メッセージ

副学長（総務、研究、国際交流担当）／大芝 亮

副学長（教育・学生担当）／落合一泰

副学長（財務、社会連携、企画・評価、情報化担当）／小川英治

附属図書館長／江夏由樹

商学研究科長／沼上 幹

社会学研究科長／村田光二

巻頭特集

日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

【対談】

住友電気工業株式会社社長

社団法人如水会理事長／松本正義氏

山内 進学長

進取の気性、冒険心、革新的指向、向上心……
今こそ日本人の持つDNAを思い出すときだ

研究室訪問 chat in the den

商学研究科教授／佐藤隆文

社会学研究科教授／伊藤るり

特集

三商ゼミ60周年

三商大戦50周年

60年の伝統を学生たちが守る

「三商ゼミ」の今



特集

My choice

詩吟のプロ吟詠家／飯島 満氏

蜷川幸雄演劇集団の役者／関根敏博氏

大学院博士課程で学ぶ／湯川真人氏

連載企画

Captains

堀 光 亀

紛擾の矢面に立ち、

一橋の黎明を支えた陰の立役者



石河光哉／作

Love of Culture

登山が求める、コモンズの復権

江戸版本の世界

Book Review

古典に学ぶ

特集

地球の風 地域の風

西條産業株式会社 代表取締役／西條文雪氏

杉山学長退任にあたってのメッセージ

前一橋大学長／杉山武彦

Campus Information

◆一橋大学基金ご寄付者のご芳名

◆一橋大学創立135周年・国立移転80周年記念事業

「記念コンサート開催報告」

「記念講演会開催報告」

◆第7回 一橋大学関西アカデミア開催のお知らせ

◆第2回 東京工業大学・一橋大学合同移動講座開催報告

◆本学法学研究科教授水野忠恒氏が「平成22年度秋の紫綬褒章」を受章

新学長からのメッセージ

一橋大学長

山内 進

Susumu Yamauchi





一橋大学のよさを 世界にどう見せるか

日本の大学が世界の大学と直接競争するようなことは、以前はほとんどありませんでした。しかし、グローバル化が進展し世界の大学との競争が激化している現在では、日本の大学にとって、その魅力を世界に向けて発信することが非常に重要になっています。本学もその魅力を世界に発信すべく様々な取り組みを行ってきましたが、これには社会科学系大学ならではの難しさ、逆に強みがあると考えます。

理系の大学では、研究成果は、英語で書いて世

界に問いかけることが一般的です。「世界の大学ランキング」などでは、こうした論文の内容や引用回数などが、研究者や大学の評価基準の一つになっています。しかし社会科学系の世界では、経済学の一部を除けば、学問の研究対象がおおむね国内の事柄なので論文を英語で書く必要性が低く、また論文のあて先は日本であり日本人であるのが普通でした。例えば、日本の法律を論ずるには、まず日本語で論文を書いて議論するのが当然で、最初から英語で論文を書く理由も必要ありません。こうした難しさがあるなかで、本学が世界的にもすばらしい大学であることを証明していかなければならないのです。

一方では、国内の問題を解決することによって世

「世界で最も強靱でSMARTな大学」に

界に貢献できるという強みもあります。現在の社会が抱える諸問題には、先進国間で共通しているところも多く、また、新興国にとっては、日本のこれまでの経験が大いに参考になることもあります。日本における様々な問題解決の経験は、グローバルな意味を持っているのです。したがって、われわれの成果を英語等で発信するのは十分に意義があります。

本学の教育や研究は、世界的に見ても非常に高いレベルにあります。もちろん国立大学として日本国民に対する直接的な貢献も大事ですが、国内だけに目を向けているのではなく、優れた研究成果を英語で世界に伝え貢献することも極めて重要な役割で、そのために必要な支援方法を模索するとともに体制を整えていきたいと思っています。

例えば英語教育…… 進む国際化対策

本学の国際化については、既に戦略の基本的な枠組は決まっております、それをどのように具現化していくかがこれからの課題です。そこで常に問題となってくるものの一つに、大学での英語教育があります。

本学は、実践的な英語力を身に付けることにより、総合的な英語力を高めることを目指しています。重要なのは、読む力とともに、書く力、聞く力、話す力をトータルにバランスよくつけることです。そのうえで専門分野について議論する力やビジネスなどで使う英語を鍛えていくことです。日本では読むことに力を入れ、英語で考え、表現することに教育の時間を余り振り向けてきませんでした。しかし、考

え、表現する訓練をすることで会話力もついてきます。その意味で、学問的に高度な英語力と会話力、その両方の教育が今の大学に期待されているのです。英語教育は、本来大学だけの問題ではありません。国の教育体系全体のなかで総合的に捉えていくべきものだと思います。しかし、大学は社会への出口に近い分だけ、担うべき責任は重いのです。

こうした問題に対して一橋大学では、ブリティッシュ・カウンシルの協力を得て、トータルな英語力強化に力を入れています。弱点を補うという意味で日常会話にも力を入れています。狙いはあくまで総合的な英語力の向上です。もともと力のある学生が多いので、期待以上の効果があがっています。

学生には 海外に飛び出してほしい

大学での英語教育を充実することで、グローバル化に対応したツールを身に付けることはできます。しかし、ツールだけでは、世界を相手に活躍することとは難しい。そこで学生には、学生時代に少なくとも一回は海外での生活を体験してもらいたいと思っています。日本語が通じない、また日本的な価値観が通じないような海外で、自分と向き合う時間をつくってほしいのです。こうした経験を積むことで、本学の優れた点も不十分な点もわかってくるでしょうし、何よりも世界と自分との距離を実感できるはずです。またそのことにより、自分の可能性を広げることでもできるでしょう。

最近、企業の人事担当の方とお会いして、本学の学生の印象についてお聞きする機会がありました。その際に私が気になったのは、本学の学生は「頭は

よいが、おとなしい」という意見があつたことです。最近の日本の学生は、様々な面において便利で豊かな環境に暮らしており、あたかも海外と積極的にかかわらずとも生きていけるような錯覚に陥ることがあります。ところが世界中に拠点を持ち、人々との交流がある大手企業の担当者からすると、日本の学生は全般的にひ弱に見えてしまつてしまうようです。そこで、本学の学生には、「賢くもあるが強靱」であつてほしい。本学には幸いにも、卒業生などの支援による充実した留学制度があり、また、それ以外にも短期留学プログラムが整備されています。学生諸君には、ぜひ大学が備えているサービスを利用して、海外に飛び出し大きく成長してほしいと思います。

本来の強みに カッコよさをプラスする

これまで本学は、「アジア・ナンバーワン、世界オンリーワン」のスローガンを掲げ、様々な試みを行ってきました。今後もこのスタンスに変わりはありません。しかし私は、そこにもう一つだけ加えたいことがあります。それは本学を「世界で最も強靱でSMARTな大学」にしたいということです。「smart power」という言葉があります。これは、米国の戦略国際問題研究所（C S I S）が発表した概念で、軍事力や経済力といったハードな力ばかりでなく、文化や技術といったソフトな力を基にした国際協力を総合的に展開するという、新しい形の対外政策戦略です。私の考えるSMARTとは、C S I Sの概念と同様にハードとソフトを



新学長からのメッセージ

山内 進

(やまうち・すすむ)

1949年北海道小樽市生まれ。1972年一橋大学法学部卒業。1977年同大学院法学研究科博士課程修了。1987年博士（法学）取得。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。2006年副学長（財務、社会連携担当）、2010年12月一橋大学学長に就任。専門は法制史、西洋中世法史、法文化史。『北の十字軍』（講談社）でサントリー学芸賞受賞。その他『新ストア主義の国家哲学』（千倉書房）、『掠奪の法観念史』（東京大学出版会）、『決闘裁判』（講談社）、『十字軍の思想』（筑摩書房）など著書多数。

併せ持つ賢明さを意味しますが、やはり「粋」のユアンスを込めたいですね。大学のハードとは本来あるべき教育や研究のことで、そのプラスαとしてのカルチャーやアートモスフェアといったソフトでも、大いに魅力を発していこうということです。

例えば、学生のみなさんが自由に集まれるような空間づくりなどに象徴されるキャンパスのリノベーションも考えられるでしょう。また、卒業生の尽力により昨年設立された兼松講堂を活動拠点にするレジデントオーケストラ「国立シンフォニカー」も、そうしたソフトの好例になると思います。大学にいてだけで感性が磨かれるような、そんなキャンパスづくりを進めたいものです。そして、このようなことが、本学の魅力の一つとなり、その魅力が世界中の受験生を引き付け、また、卒業生の誇りともなれば嬉しい限りです。

ただSMARTというソフトの面が強調されるので、これに強靱という言葉をつけ加えたいと思います。物事をなすには強さが必要です。

「世界で最も強靱でSMARTな大学」。中身があつてタフでカッコがいい、文化の薫りがする大学。こうした魅力づくりは、世界で競争していくうえでも大切な要素だと思います。（談）

新任者メッセージ

新任副学長

副学長（総務、研究、国際交流担当）

大芝 亮

副学長（教育・学生担当）

落合一 泰

副学長（財務、社会連携、企画・評価、情報化担当）

小川英治

新任図書館長

附属図書館長

江夏由樹

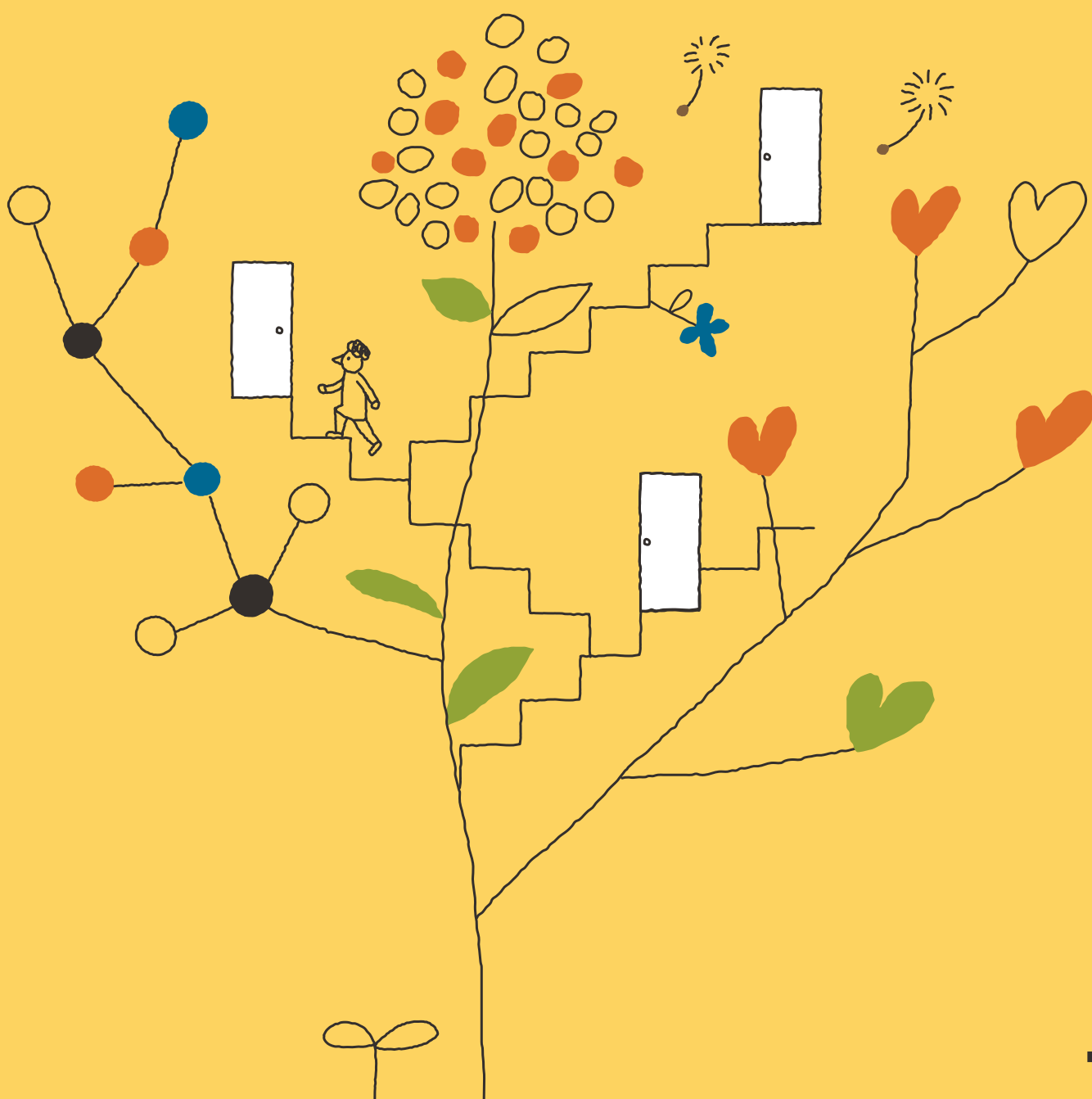
新任研究科長

商学研究科長

沼上 幹

社会学研究科長

村田光二



Ryo Oshiba



国際的な「仲間づくり」を通じて 世界的に魅力のある大学をめざす

総務、研究、国際交流担当の副学長を引き受けることになりました。

現在、日本は経済的に停滞しています。政治的にも混乱しています。進路が見えないこのような時こそ、大学がきちんと世界の政治経済や社会状況を分析し、日本のとるべき進路を示す使命があると思っています。

一橋大学がこのような使命を果たすために、まず必要とされていることは、現在の状況をさまざまな角度から分析し、研究機関としての能力を発揮することです。政策的な課題についてのみならず、より根源的な問いについてじっくりと思索することも重要です。応用研究とともに基礎的な研究も重視されるべきであり、アカデミックな研究を多方面からサポートしていく。このような姿勢で諸問題に取り組みたいと思っています。

優れた研究を進めるには、世界のトップクラスの研究者と知的に交流することが不可欠です。一橋大学の教員は個々のレベルで積極

的に世界の研究者と交流し、外国の学会でも発表をしてきています。若手研究者にもこのような機会がいつそう増えることが望ましいと思います。

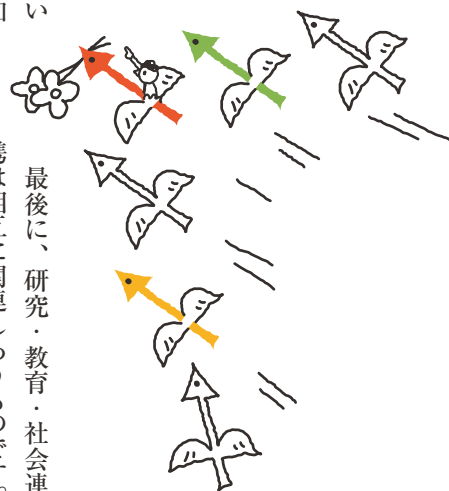
大学として、多様な国際共同研究に取り組み、また、より継続的な協力体制を築くために世界各国の大学と学術交流協定を結んできました。こうした実績に基づき、これからは、2つの大学間のバイラテラルな協定だけでなく、複数の大学とのマルチラテラルな学術協力体制を築いていきたいと思っています。いわゆる知的ネットワークの形成であり、これにより本学における研究・教育の身を充実させていくことをめざします。

ヨーロッパでは、主に教育の分野ではありますが、エラスムス計画（ERASMUS）と）、EU域内の大学間でのネットワーク化が進展しています。一橋大学においても、いわばアジア太平洋版エラスムス計画として、アジア太平洋地域の優れた大学との学術・教育のネットワークを形成し、

次に、これをひとつの足がかりとして、EU域内の傑出した大学ともネットワークを形成し、さらにはアメリカの大学との交流強化につなげていく。そして、ネットワーク参加

の、いわば「仲間」とともに、共同研究はもとより、可能な分野での共通の教育プログラム開発など、研究・教育の身の充実を図り、本学を世界的に魅力のある大学へと発展させていきたいと思っています。

私の専門である国際政治学では、こうした「仲間づくり」がおよそ不足していることがしばしば指摘されます。日本の大学の「世界戦略」においても弱いところであるように思えます。とはいっても、組織としての共同研究や共通の教育プログラム開発ばかりを重視するというのはなく、個人であればグループであれ、個々の自発的な研究が世界で高く評価されていくことをめざすのが基本であり、こうした戦略は、個々の研究をサポートするためのものと位置づけています。



最後に、研究・教育・社会連携は相互に関連しあうものです。

優れた研究者⇨優れた教育者であるとは限りませんが、優れた教育を行うためには、優れた研究者であることが必要であると思います。一橋大学の教育をいっそう向上させるためにも、研究環境を整備することが不可欠です。また、研究の成果を色々な形で社会に還元していくことが必要です。われわれが大学で研究に従事できるのは、社会のさまざまな支援のおかげであり、社会連携のなかで、どのように研究成果を還元するかを常に考えておくことは、学術研究に従事するものの責務であると思っています。

山内新学長のリーダーシップのもと、3人の副学長が連携して研究・教育・社会連携の国際化・グローバル化を進めていきたいと思っています。（談）

Kazuyasu Ochiai



学生が自分を創る その支援が大学の役割

大 学が果たすべき最も重要な社会的責任は、学生一人一人が社会に貢献する力を備えた人間として巣立っていくことを後押しし、見届けることです。学生には、日々の研鑽を通じ「自分は成長した」という実感を得て社会に羽ばたいてもらいたいと思っています。

学生には、「卒業時にはこういう人間になりたい」という出口ビジョンを持ち、「その実現のためには何をしたらいいのか」というロードマップを考えてほしいと思います。そのビジョンは学年の進捗とともに変わるかもしれませんが、そうした更新を前提に、常に出口ビジョンとロードマップを念頭に置いてほしい。学生にとり、そのプロセスをたどる努力が自分に対する「契約履行」であり、それが「大学の四年間で自分をここまで創った」という達成感につながります。

学生が主体的に自分を創っていくよう、大学は次のような対話型の教育システムの構築に努めています。

- (1) 学生が将来計画を立てられるよう、各学部は入口・中身・出口に関する三つのポリシー（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）を明示する
- (2) 各教員は担当する授業や演習の詳しいシラバスを示す
- (3) 学生はそれらに基づいて学習計画を立て、履修科目を登録する
- (4) 教員はシラバスに即して授業を進め、出欠を含めた厳格な成績評価を行う
- (5) 学生は自分の成績やGPA（成績評価平均値）を自己分析し、必要に応じ学習指導を大学に求める
- (6) 学生は履修科目の授業評価を行う
- (7) 学生の授業評価を受けて、教員はよりよい授業を設計する

大

学のもうひとつの重要な役割は、本学でいえば学生団体の課外活動、KODAIRA祭、一橋祭などを大学教育の一環として支援することです。学生が教職員や他の学生に配慮しつつ協調し

て活動し、その機会に学外社会とも秩序ある連携を広く実践していくのであれば、それは教育上おおいに有意義です。

本学は大学院重点化大学です。以前にくらべ大学院生が大幅に増えました。ですから、研究力ある高度職業人や専門職の知識や技能を備えた専門職業人を養成する観点から、その教育支援、研究支援、進路支援等に力を入れることは当然と考えています。

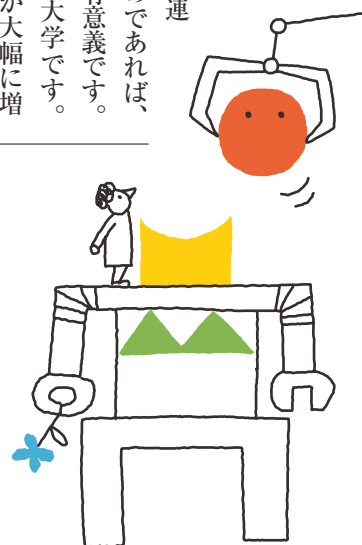
就職情報は大事です。学部生、大学院生を問わずキャリア支援室で相談員と話し合ってください。

山

内学長が掲げる「グローバル一橋」を教育面でいかに実現するか、これは重要なチャレンジです。本学が育成する国際的なCaptains of Industryには、世界の多様な文化や社会の価値体系の間に一定の交換性を見出し、それを職業的実践につなげる力を持つてほしい。異なる価値意識の間での「チューニング」（調律、調整）能力は、鍛えられた英語力とともに、リーダーシップあるグローバル

人材の条件の一つだからです。同じことが大学そのものにも言えます。学生の海外派遣や留学生受け入れを恒常化するには、本学の教育機能の国際的認知度を高めなければなりません。具体的には、海外諸大学との間で「チューニング」（科目の単位互換性や課程の比較可能性の相互認定）を進め、本学が教育面でも国際基準を満たす優れた機関である証を得たいと思っています。

本学には長い歴史のなかで教職員と学生が築いてきた魅力的な社会空間があり、それは広く外部に開かれています。その内と外をつなぐOB・OGの存在と協力が、他に類を見ない本学の質の高い教育環境を作り上げていると、日々感謝しています。（談）



Eiji Ogawa



イノベータータイプに考え ダイナミックに変革していく

山

内新学長が大きく掲げられているテーマに大学のグローバル化があります。私の役割は、与えられたミッションを遂行しつつ、ほかの2人の副学長と連携協力して、その実現を目指していくことです。

私の担当は、財務、社会連携、企画・評価、情報化。グローバル化にはしっかりとした財政基盤が不可欠ですから、100億円の目標を掲げている一橋大学基金の充実を図ることが必要です。そのためには、同窓会や、企業への働きかけが重要になってきます。また、積極的に外部資金を増加させていきたいと考えています。

社会連携においては、産学官で連携し、教育研究を進めていくことが重要になってくるでしょう。加えて一橋大学は国立という場所に位置しているわけですから、国立市、多摩地区への貢献も考えなければなりません。すでに、市民公開講座など国立をベースにした活動を行ってきましたし、開放講座、関西アカデミア、中部アカデ

ミアなど社会科学の総合大学として全国を視野に入れた講座も展開しています。これらをさらに充実させ、確固たるものにしていくしたいと思います。また、学外の方々と連携を強めることが、一橋大学のブランディングにも繋がっていくことになるのだと思います。

評価については毎年実施していますが、単にその善し悪しに一喜一憂するのではなく、具体的な政策に反映させていくことが重要になります。私自身は今年度大学入試の評価を担当しました。その経験も踏まえて、一橋大学にとって将来プラスになるような政策提言型の評価を行っていきたいと考えています。良い点を伸ばし、問題点を改善できるような建設的な評価は、より良い大学づくりに繋がると確信しています。

情

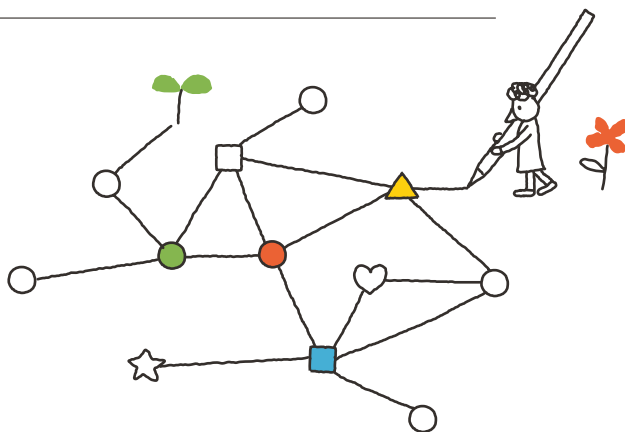
報化は、長期的な視点で取り組むべき課題です。そのためのグラウンドデザインを構築することが必要です。情報システムの統合化によって業務面における一層の効率化を図っていかなければ

なりません。一方で、今すぐやるべきこととして、情報基盤のインフラ整備とともに、情報セキュリティの確立が重要です。

グ

ローバル化について言えば、大学のグローバル・ブランド化を図ることが必要です。一橋大学のアジアでの位置を確かなものとし、世界のなかでも存在感のある大学にするためにも、的確なサブスタンスのある情報発信をしていかなければなりません。その実現に向けて、教育担当、研究担当の副学長と連携しながら取り組んでいきたいと思っています。産学連携でもグローバル化が必要です。例えば、すでにEUSIにおいては欧州委員会との連携を進めてきました。さらに、アジアの発展のための研究について、日本のみならず、海外の企業との連携も視野に入りたいです。

一橋大学には135年の歴史と伝統があり、学問的知識の蓄積があります。これらの一橋大学の素晴らしさをいかに目に見える形にしていけるかが重要です。まずは、



現在、世界で関心の持たれている重要課題の研究を進めたり、教育面におけるグローバル化を推進したりしていくこと。イノベータータイプに考え、さまざまな現在の重要課題に取り組むことによって、逆に伝統の重みと一橋大学の素晴らしさが見えてくるのではないでしょう。

伝統として重んじるべき部分とイノベータータイプに変革していく部分のバランスを考え、ダイナミックにさまざまなことに挑んでいきたいですね。（談）

Yoshiki Enatsu



閑静な中にあつて動的に 図書館が呼吸する

私

と図書館との関わりは、35年前の大学院生時代にまで遡ります。現在の図書館の様子は当時とはすっかり変わりました。今は開館時間も夜の10時まで延び、また、蔵書の多くも開架式になっており、利用者にとっては大変便利になりました。もともと大閲覧室などには昔の面影が色濃く残っており、そこを訪ねると本当に懐かしい思いがします。

私は中国東北部（旧満洲）の歴史を研究してきたので、旧高等学校時代の資料をはじめ、図書館の蔵書にはずっとお世話になってきました。私にとって、図書館はホームグラウンドのような存在といえます。

図書館には、静かにそこで書物を読むといった「静」のイメージがあります。しかし、現代の図書館は、一見静的であります。実は「動」の世界ではないかと思っています。

一橋大学附属図書館の特長の一つは、専門図書費が効率的に活用され、蔵書数が約180万冊と、

大学の中央図書館として、大いに誇れる規模を有していることです。さらに、古典資料センターなども利用できます。図書館では、約50名の職員が活躍し、これら書籍が体系的、網羅的かつ集中的に管理されています。

こうした書籍に加え、社会科学の研究に欠かせない学術雑誌、さらに近年は電子ジャーナルなどの学術資産を整備、蓄積して利用者に供するのは大変な仕事だと思いました。

図

書館は学術的資産を活用させるための心臓部にあたります。その機能を十分に発揮することが重要になります。今申し上げたように、社会科学の分野でも、ジャーナルの役割が非常に重要ですから、書籍と併せてその充実を一層図っていかなくてはなりません。電子ジャーナルなどの価格高騰を考えると、一大学だけでは整備が難しい面もあります。この先、電子ジャーナルなどは、複数の大学で共有するような仕組みづくりが必要になるかもしれません。

せん。図書館長としては、他大学との連携といった外向きの仕事があります。ますます重要になってくると思います。

現

在、図書館では「機関リポジトリ」の整備を進めています。大学が学術情報を電子化して発信する仕組みですが、各大学がそうした事業を進めていけば、

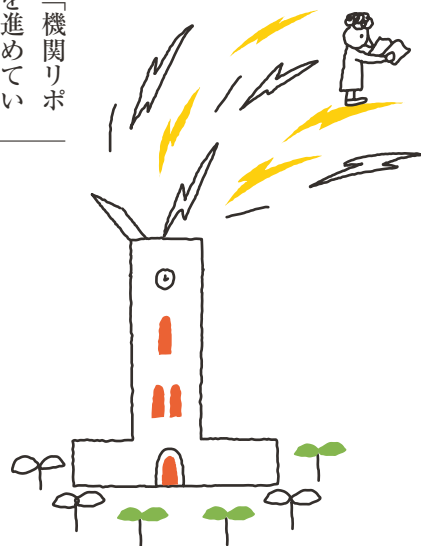
電子情報の共有化が加速していきます。例えば、電子化された論文の場合は、どれだけ閲覧されたかがヒット数でわかります。ある意味では、筆者と読者が双方の関係にあるともいえます。紀要の類などは、これまで外部の人にとっては入手が難しかったといえます。そのため、電子情報化された本学の紀要などは、現在、その閲覧数も多いようです。課題はいろいろありますが、一橋大学の学術資料のデジタル化は進んでおり、さらに非図書資料のデジタル化も進んでいるところです。

こうして挙げてみるだけでも、今までの静的な図書館とはかな

り異なった図書館の姿が見えてきます。

また、学生へのサービスの充実も大切な仕事です。その一環として、学生へのレファレンスサービスや論文の書き方の指導なども行っています。それらをもっとアピールしていくことも必要でしょう。このように、図書館としては、絶えず新しい情報を蓄積し、整備し、効率的に活用されていくようにしていかなければなりません。それは、図書館が呼吸しているということです。

図書館の書籍購入冊数は年間約3万冊です。現在の書庫では200万冊でパンクしてしまいますので、蔵書の収納の問題も大きな課題です。（談）



新任研究科長メッセージ

社会学研究科長 村田光二

Koji Murata



新任研究科長メッセージ

商学研究科長 沼上 幹

Tsuyoshi Numagami



一橋大学商学部・商学研究科の立ち位置は「実学の象牙の塔」

商

学部・商学研究科では、いろいろ議論を積み重ねて、革新的に教育カリキュラム改革を進めてきました。学部では、1、2年次からゼミ教育を実施し、ゼミをコアにした4年一貫の体系的な教育を行っています。大学院研究者養成コースでは、博士号取得後1年以内に欧米の学会で報告し、論文公表できるようにするのが目標。グローバルCOEを起爆剤に国際化を進めています。

す。経営学修士（MBA）コースでは、高度な実学志向のカリキュラムで学びます。ここでも国際的な視点が、金融やツリー図のプログラムがその一つの突破口となるでしょう。今後の商学研究科の教育・研究についてはグローバルバリエーションがキーワードとなるでしょう。

その準備として、特に学部入学直後からグローバルに活躍しようという



を練っているところです。

橋大学は日本の経済社会を根幹から支える人材を輩出してきました。バブル崩壊後20年の反省は、社会科学の思考力の差で日本が不利に立たされたということですから。日本経済の根本的な立て直しは、

う高い志をもってもらうことが必要です。「鉄は熱いうちに打て」で、第一線で活躍し役割モデルになるようなOB・OGと間近に触れ合える機会を提供できるように、案

実務の世界で経営を担っている人たちの優れた社会科学の洞察力にかかっています。グローバル競争時代に日本を再活性化するには、社会科学の分析力を身につけ、グローバルな経営の場でそれを生かせる人材を輩出しなければなりません。

一橋大学の立ち位置は、伊丹敬之名誉教授の言うところの「実学の象牙の塔」であり、アカデミックな洞察力をもって現場・現実を語り、リードすることのできる人材の育成にあるといえます。つまり世界で通用する洞察力豊かな人材を輩出していくことがわれわれの使命であると認識しています。（談）

教育・研究・管理・運営の業務バランスを考えて、日々の仕事に集中したい



社

社会学研究科は、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」（社会科学の先端的研究者養成プログラム）、「キャリアデザイン」としての大学院」と、2006年度から2009年度まで大学院教育の新しい取り組みを進めてきました。

画期的なのは英語やIT教育というスキル教育を大学院レベルで、しかも

多くをアウトソーシングという形で取り入れたことです。もともと一橋大学は、歴史、思想研究では定評がありました。しかし、研究を新しい次元にまで発展させるためには、新しい技法が必要だと認識しています。

さらに、大学院では専門社会調査士、学部では社会調査士の資格を取得できるようにしました。貧困調査や原爆調

両

重要な要素は授業科目として取り入れています。この試みは、かなり効果をあげていると思います。とりわけ、他大学から一橋大学の大学院修士課程をめざす人には魅力を感じてもらっているようです。

ここ1〜2年で4分の1の教員が定

査などインタビューにより対象者の本音を引き出す質的調査を中心に行ってきましたが、アンケートなどを用いた量的調査には、これまであまり力を入れてきませんでした。そこで、数量データ分析のスキルもこれらのプログラムで提供してきたのです。

年で退任し、若手研究者と入れ替わりました。新しい分野の研究に取り組んでいる教員も増えてきました。こうした教員が気持ちよく教育・研究に専念できるような環境づくりが研究科長としての私の役割だと考えています。

一方、私は自分のアイデンティティを大学および大学院教師という立場に置いています。学部所属の専任では一橋大学唯一の心理学者として、学生に接するのが私の務めだと認識しています。そのスタンスは、研究科長に就任しても変わるものではありません。タイムマネジメントをより意識し、業務に取り組んでいきたいと思っています。（談）



日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

住友電気工業株式会社社長
社団法人如水会理事長

一橋大学長

松本正義氏 × 山内進

進取の気性、冒険心、革新的指向、向上心……
今こそ日本人の持つDNAを思い出すときだ

リーダーに期待されるのは、平常心、自然体、正々堂々、誠心誠意だと語る、住友電気工業株式会社の松本社長。とりわけ変革期には、「気骨ある異端児」が必要だという。一橋大学同窓会組織である如水会理事長としても活躍している松本社長と山内学長がグローバル時代の人材像について話し合った。

人と人との絆を深めた 自作漢詩のプレゼント

山内 本日は、如水会理事長を務めている住友電気工業の松本社長におこしいただきました。意外といっちは失礼ですが、松本さんは漢詩を読まれるとか？

松本 殺伐とした時代ですから、なにかほっとすることがないかと、朝、漢詩の好きなところを開いています。

山内 なにしる漢字ばかりですから漢詩は読むこと自体が難しいし、熟練するのは大変だと思えます（笑）。



松本 いや、習うより慣れろ、ですよ。日本人は漢字に馴染んでいますし、学校でも漢文や漢詩は習ってきています。一度馴染んでしまえば、ハドルはそんなに高くないと思います。もともと大正時代は体育会系で陸上競技部の活動が中心でしたし、読書といえど小説など散文系がほとんどでした。会社に入ってから漢詩を読んで心を鎮めるようになりましたね。じっと見ていると意味がわかってくるものです。

山内 漢文では、「レ点」などの返り点が便利ですね。ほかの外国語でも返り点のようなものができないかと研究したという話があります。

松本 漢詩は唐時代にルールが確立しています。中国の人は規則性を重んじるというか、システムティックな面があります。漢詩は起承転結はもちろん、押韻があり、音の平仄ひょうてくも合わせなければなりません。日本の俳句では、五七五で季語を入れればあとは自由奔放でもかまいませんが……。

山内 それにしても高尚な趣味ですね。ところで、ご自身の作品はあるのですか。

松本 ロンドンに責任者として駐在したときに、欧米への反発心もあって漢詩を好んで詠みました。そのときの詩が残っています。最近では、中国の杭州に光ファイバー関連のビジネスで行きました。富陽というところにジョイントベンチャーで、光ファイバー・ケーブル製造関連会社を設立したのです。その調印式のときに、お祝いの気持ちから即興で記念に七言絶句をつくって渡しました。ルールに基づいていませんが、感謝の気持ちを込めてつくりました。

新秋爽風渡杭州

水光瀲灩映西湖

朝発大阪到富陽

拳傾玉杯祝成功

日本人的な漢詩ですが……。帰国してしばらく経ったときに、中国から荷物が届きました。なんだろうと思って開けてみると、幅80センチ、長さ2メートルもある立派な掛け軸でした。中国のパートナーが、私の漢詩を書家に揮毫きこうしてもらって贈ってくれたのです。漢詩の出来栄えより数段素晴らしい装丁でした。なによりもパートナーのひとと人との繋がりを大切にする気持ちがうれしかった。



山内 一番好きな詩はなんですか。

松本 杜牧とほくですね。「清明の時節」という詩があります。

清明時節雨紛紛

路上行人欲斷魂

借問酒家何処有

牧童遙指杏花村

「清明の時節 雨紛紛

路上の行人 魂を断たんと欲す

借問す 酒家は 何れの 処にか有る

牧童 遙かに 指さす 杏花の村」

初春のこぬか雨の先に白い杏の花が咲いている。



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？



松本正義（まつもと・まさよし）

1944年生まれ、兵庫県出身。1967年一橋大学法学部卒業後、住友電気工業株式会社入社。

1985年海外事業部業務部（ロンドン駐在）Sumitomo Electric Europe S.A.社長、

1996年中部支社長、1999年常務取締役、2003年専務取締役、2004年6月社長就任。

2009年より一橋大学学外理事、2010年8月より如水会理事長。

趣味はジョギング、読書、絵画鑑賞など。中学時代は野球、高校では柔道にうちこむ。
大学では陸上競技のやり投げ選手としてインターカレッジに出場した経験もあるスポーツマン。



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？



寒さからか、牧童に酒家のありかを聞く……中国らしい詩だと思えます。

歴史の歯車が突然回り出した

山内 ロンドンのお話が出ましたので、少しその当
時のお話をお聞かせください。

松本 1985年のプラザ合意の年から1992年
まで赴任しました。レーガン、ゴルバチョフ、コー
ル、ミッテランといった大物政治家が活躍する激動
の時代で、その頃にヨーロッパに滞在できたことは、
私にとって幸運でした。

山内 幸運ですか。見方によっては、変化が多く大
変な時期と捉えることもできると思います。幸運と
捉えることで、結果が違ってくるのでしょうか。

松本 歴史の歯車は突然回り出します。「ECがど
うなっていくのか、情報を取ってこい」と送り出さ
れました。1989年にベルリンの壁が崩壊し、ヨ
ーロッパの政治統合を見据えた経済統合が始まりま
した。ヨーロッパ全体が、日米にサンドイッチにさ
れて経済的に衰退していくという危機感から、イデ
オロギーの違いを乗り越えたのです。

山内 1985年といえば、私もロンドンにいま
した。

松本 前学長の杉山さんもいらしていました。交通
経済学の講演を聞き、そのあと如水会で集まって、

会食したのを覚えています。

山内 私たちの世代は、ゴルバチョフ改革、ベルリ
ンの壁崩壊とすごい時期を体験していますね。強固
そのもので壊れることはないと思われていた。し
かし実際は、ソ連もその衛星国も崩壊してしまった
のですから……。

偏差値はまったく関係ない キャンパスを見て一目惚れ

山内 話は前後しますが、松本さんが、一橋大学に
入学された動機についてお聞かせください。

松本 高校の先輩のちに一橋大学ボート部で活躍



した登里という先輩が入学したという話を聞いて、休みの日に国立を訪れたのです。それまでは、「一橋？ それ私立？」という感じで、まったく知りませんでした。親父が「ともかく行ってこい」と言うので、キャンパスをのぞきに行ってみたのです。そして一目で気に入りました。ユニークな歴史を持つ大学であることを知り、納得して受験を決意しました。偏差値とはまったく関係なく、本当にいいなと思ったのです。

大学ではいろいろな人との出会いがありました。ゼミでお世話になった吉永榮助先生は一橋大学に大変愛着のある先生でした。正月には学年別に先生のお宅に招かれました。また、陸上競技部の部長は都留重人先生でした。関西出身の私には、先生の鋭い口調が最

初は冷たく感じられたのですが、年末になるとOBも含めて寿司職人を呼んでの大パーティを開くなどとても面見の良い先生でした。都留先生の奥様のピアノもよく覚えています。陸上競技部の練習はよく見に來られましたし、三商大戦は必ず観戦されていました。先生方には、いろいろな面で薫陶を受けましたが、風通しの良い師弟関係のなかからリーダーとしてのあり方を学んだように思います。

山内 陸上競技部は強かったのですか。

松本 都留先生は、三商大戦の競技の結果を定量分析で予測するんです。客観的なデータを集めて、今年はこの大学が勝つと予測するのですが、毎年一橋大学が勝つという結論になるんですね。実際に、当時は6年連続で優勝していました。私もやり投げ

で66メートルを記録しましたが、この一橋大学の記録は未だ破られていません。

ビジネスサイクル3週間から数秒で反応の時代へ

山内 住友電工という会社に入ったのは、どんないきさつがあったのですか。

松本 長男ですから関西で就職しようと思って、ある方に相談したのです。するとその方の義兄が住友電工の専務でした。まだ、売上が600億円ぐらいの会社でしたね。そこで、訪問してみると、面接1分ぐらいで、採用が決まってしまった。なんとも牧

歌的な経緯で入社することになりました。当時は、就職難だったのですが……。

山内 そういう巡り合わせもあるんですね。今の学生も、いろいろな会社を選択肢に入れるといいですね。成熟した大手企業だけが会社ではないし、むしろ、今は、小さいが成長しそうな会社のほうが、自分の力を発揮しやすいかもしれない。

松本 私も若い頃はやりたい放題でしたからね（笑）。私はロンドンに赴任する前にシカゴに行きました。1973年から1978年までですね。当時は今ほど通信手段が豊富ではなく、会社への連絡といえど手紙かテレックスです。事務所に戻ると何十メートルものテレックスが届いていることもありました。手紙だと往復するのに2週間以上かかりました。都合約3週間がビジネスサイクルでした。しかも駐在員は私だけで、アメリカ、カナダ、メキシコを一人で担当していました。忙しさこそありましたが、できることにも限りがあるため、物事をじっくり考える時間もありました。今は数秒で連絡できますから、慌ただしい時代となりましたね。

若い人たちは、落ち着いて物事を考える余裕がなくなっているようですね。しかし、スピード、スピードですべてを捉えていると、十中八九は失敗してしまいますよ。忙しすぎます。

山内 そうですね。かつてのように1週間や2週間の猶予があればじっくり考えられます。即応、即応では大変です。しかし、松本さんが海外で活躍されていた70年代、80年代に日本から世界的な企業が育ってきましたね。



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？



戦後の廃墟から這い上がった 日本人の精神的美質と気概

松本 1973年頃には、グローバリゼーションという言葉は聞かれませんでした。高島善哉先生が「ナシヨナリズムに基礎を持たないインターナシヨナリズムは根無し草云々」と言っていたのは覚えていますが、グローバリゼーションは80年代あたりから使われ始めた言葉です。それに呼応して企業の国際化も進展しました。日本の産業構造が変わっていくときに、中堅社員としてその一翼を担えたの

はラッキーでしたね。

山内 「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われた時代からバブル期、バブル崩壊を経て停滞期に入ってしまった。リーマンショック以来、学生の就職環境も悪化しています。一方で、アジアは上り調子にあります。

松本 終戦直後の廃墟のなかから世界第2位の経済大国になった過去を、今こそ学ばなければなりません。アメリカの未来学者ハーマン・カーン博士が、1968年に京都産業大学の招きで来日した際に、講演で日本人の精神的本質を指摘してくれました。それは、「進取の気性に富む」「旺盛な冒険心に富む」「革新的指向に富む」「教育水準が高く向上心に富む」

「目的達成志向が強い」「企業の成功と国家の栄光の一体意識が強い」というものです。今こそこれらのキーワードを思い起こして、日本を世界の檯舞台に再び立てるようにしなければなりません。日本人一人一人にその気概が必要なのです。グローバルゼーシヨンのなかで活躍できる仕組みをつくれれば、日本人はこうした能力をDNAとして持っているわけですから、私自身は将来を楽観的に考えています。



ノウハウよりも重要な 基本・教養・体力

山内 大学や高等教育に対するご意見をお聞かせください。

松本 如水会の理事時代に、いろいろなことを会報の巻頭言に書きました。例えば、教員と学生との距離を縮める、双方向コミュニケーションの強化……。私たちの母校への愛着のベースは、恩師から受けた愛情にあります。近年、一橋大学は、研究分野において、素晴らしい業績を残している反面、教育分野にはもっと力をいれたほうがいいのではないかという意見もあります。学生には、4年間の学生生活のなかで、ゼミやクラブなどを通じて将来のベースとなるものを身につけさせていく必要があります。そ

うした支援が、学生の大学に対する愛着に繋がるのかもしれないし、なんらかの方法を考える必要があると思いますね。

山内 EUやアメリカ、中国でも、大学に資金を投入して人材を育成しています。また、日本企業は日本人の採用にこだわらなくなってきました。日本の大学教育に欠けているものはなんでしょうか、そして、企業は学生になにを期待しているのでしょうか。

松本 今の学生が自分のキャリアパスをどう想定して大学時代を過ごしているのかを考えると、少し不安になります。4年間をただただ過ごすのではなく、



学生時代にいろいろな刺激を受けて視野を広げ、将来へのきっかけを見つけてほしいと思います。

山内 一橋大学の学生は、卒業生が主催してくれているキャリアゼミやインターンシップなどの機会にも恵まれています。今の学生は、我々の学生時代よりもキャリアについては考えています。昔の学生は社会について考えていましたが、今の学生は会社について考えているのです。

私は、今の学生の成長に有効なのは、学生時代に海外に出ることではないかと思っています。日本語が通じない文化、風習が違ふなかで苦労する。困難を打破しようともがくなかで、自分で物事を考える力、判断力、生活力がついてきます。結果的には、知識や技術を磨くことにも繋がります。私は、学生全員が一度は海外に行くような仕組みを一橋大学につくりたいと考えています。力強さ、タフさといったものは、言葉で理解してもだめで、体験することが必要なのです。

松本 それはいいですね。如水会もよろこんで応援します。かつてイギリスのラグビー校を訪問したことがあります。大英帝国を支えたのは、パブリックスクールの寄宿舎生活です。そこでは、ノウハウより基本・教養・体力を鍛えています。日本の教育に欠けているのは、それです。私はいつも、知力・体力・胆力で、誠心誠意正々堂々と人生を生きろと言っています。

山内 大学の教育環境そのもののなかで、そうした素養を身につけられるようにしたいと思っています。本日は、ありがとうございました。

金融システムは空気や水に似ている!?

民間セクターが担う

決済機能と金融仲介機能

金融システムは空気や水に似た面があります。我々の日常生活で空気の存在を意識することは少ないですが、日本なら国内どこでも水道の蛇口をひねれば清潔な水が手に入ります。ところが、大気汚染を経験するときに空気のありがたさを実感しますし、災害でライフラインが破壊されれば水道の復旧は最優先事項になります。きれいな空気や水は元々は大自然の恵みですが、その享受は運営者の努力や公的規制によって支えられているのです。

金融システムの円滑な運行も同様です。日頃、さまざまな金融ニーズに対応した多様なサービスが安定的に提供されるのは当たり前のことのように感じられますが、金融危機に直面すると金融システムが一定の脆弱性（もろさ）を内包していることがわかります。

我々の金融システムの特徴は、高い公共性を持つ金融サービスの提供が銀行や証券会社など民間営利企業によって担われているところです。また、金融市場には多くの取引主体が利益を目的に参入してきます。

このような金融システムが、社会の経済活動全般に欠くことのできない「決済機能」と「金融仲介機能」を担っています。決済機能とは、財・サービスの売買



に伴う対価の支払い、金銭貸借やその返済に伴う資金の移動などが確実に履行されるためのメカニズムです。預金口座を経由して、給与の受取り、公共料金の振込、クレジット・カードの支払いなどが行われるのはその一例です。金融機関のネットワークと日本銀行のシステムがこの機能を支えています。金融仲介機能とは、金融機関や金融市場が仲立ちとなって資金余剰主体（貸し手）から資金不足主体（借り手）へ資金が流れる社会的仕組みです。価格メカニズムに支えられて、

国境を越え、異なる産業分野にまたがり、異時点間の橋渡しをしつつ、効果的にこの金融仲介が行われれば、社会全体としての経済活動水準が高まります。

高い公共性のゆえに必要となる

効果的な金融規制

このような金融システムの持つ高い公共性のゆえに、金融業や金融市場には、他の分野にはない多くの



公的な規制がかかっています。わが国の金融行政を担っている金融庁は、その中核的な政策目標として、(1)金融システムの安定、(2)利用者の保護、(3)市場の透明・公正、の3つを掲げています。「金融システムの安定」とは、その構成要素が連携を保って円滑に作用し、契約がきちんと履行され、金融機関の財務の健全性が維持され、市場の価格発見機能が十分に発揮されるよう、規制・監督を及ぼすことです。「利用者の保護」とは、金融サービス提供者者に契約の適切な履行を求めるとともに、利用者の自己責任に裏付けられた判断を支える等の行政対応です。「市場の透明・公正」とは、市場に参加する不特定多数の取引主体が合理的判断を行えるよう情報開示の制度を整えるとともに、市場参加者の間の公平を確保するため不正取引を禁ずる等の対応です。

金融規制・監督の必要性は、しばしば金融システム

に内在する「外部性」という概念によっても説明されます。例えば重要な金融機関が経営破綻すると、その損害は当該金融機関の株主、債権者・預金者、借り手企業などの直接取引相手だけでなく、他へ伝染して金融システム全体に伝播しかねません。つまり、私的費用を上回る社会的費用が発生します。こうした外部性を「内部化」して負の社会的費用をできるだけ小さくすることが、金融当局の重要な任務のひとつです。

他方、金融システム安定のためとはいえ過剰な規制に走ると、金融サービスの質が低下し、イノベーションが行われなくなり、金融仲介が限定的になってしまいます。そこで、公共性と民間活力のバランスが重要になってくるのです。

このように、金融規制は金融システムの不可欠な一部であり、その質の良し悪しがその国の金融全体の安定度や利便性などを左右するともいえます。米欧で、金融規制が重要な研究分野として定着しているのはこのためです。

グローバル金融危機が提起した新しい課題

2008年9月のリーマン・ショックを頂点とする今回のグローバル金融危機では、日本の金融システムは相対的に安定していたものの、米欧では深刻な「市場型システムミック・リスク」が顕在化しました。もともと金融システムはさまざまな構成要素が連携して動く複雑な仕組みですから、一か所に不具合が生じるとそれが広く伝播してしまう傾向を持っていますが、今回の危機では、金融商品の市場価格の急落、それを担保とした資金調達への行き詰まり、

市場における流動性の枯渇と価格発見機能の喪失、金融機関の自己資本不足と財務悪化などが、相互に増幅するような形で生じました。

このような事態を受け、金融規制の新しい課題のひとつとして浮上しているのが「マクロ・プルーデンス監督」というアプローチです。個々の金融機関の健全性を中心に監督していく、伝統的な「ミクロ・プルーデンス監督」に加え、市場全体の動きをモニターし、金融機関の行動に着目すること等で、金融システムそのものの安定をより直接的な政策目標に位置付けるものです。

この点を含め、グローバル金融危機を受けて、世界的な金融規制の再構築が進行中です。自己資本規制、流動性規制、業務範囲規制、市場規制などの強化が進められています。

金融業の変貌や市場の実態に応じて常に進化を求められるのが金融規制であり、わが国の規制・監督も、国際的動向を踏まえその努力が続けていく必要があります。しかし、今回危機で混乱が軽微であった日本には、同時にもうひとつの重要な課題があります。それは、わが国の金融資本市場の競争力強化という目標です。その実現のためには、十分な実効性を持つと同時に、民間活力を萎縮させることのない「賢い規制」に努めることが大切だと思います。(談)

商学研究科教授
佐藤隆文
(さとう・たかふみ)

1973年一橋大学経済学部卒業、1977年オックスフォード大学・修士、2002年名古屋大学・博士(経済学)。1973年大蔵省入省。主計局主計官、銀行局総務課長などを経て、2001年金融庁総務企画局審議官、2002年同検査局長、2004年同監督局長、2007年金融庁長官(2009年退官)。2010年より一橋大学大学院商学研究科教授。著書に『金融行政の座標軸——平時と有事を越えて——』(2010年・東洋経済新報社)など。

家事・介護労働者の国際移動をテーマに、 実態と問題点についてグローバルに調査し、研究する

高齢社会で「介護」を支える

移住労働者の実態は？

「再生産労働」のグローバル化はいま、日本にさまざまな問題を投げかけています。再生産労働とは、「人の再生産にかかわり、多くの社会で家族、とりわけ女性によって担われ、往々にして対価を受け取らない労働」と位置づけられてきまし



た。家事や育児、介護などの労働が、これにあたります。しかし、ご存じのように日本では世界で類を見ないほど、少子・高齢化が進んでいます。

65歳以上の高齢者は2933万人、高齢化率は23・0%（2010年11月総務省調べ）と、5人に1人が65歳以上という高齢社会は現実のもの。

高齢者の「介護」を海外の人材に頼らざるをえないという声が聞かれるようになりました。こうした事情は日本に限らず、世界各地で見られ、介護や家事を担う女性移住労働者の数が増加してきています。その実態を調べるのが、私の現在の研究課題です。

生まれ、育ち、死ぬという人の一生のなかで、高齢者の身体的・心理的ケアは、非常に重要な役割をもっています。誰もが直面するリアルな問題であるにもかかわらず、その担い手には、最近まで社会的にも研究対象としても光が当たることは少なかったと思います。最近では親の介護に男性が参加するケースも出てきましたが、介護の担い手は嫁や娘、あるいは妻など女性が多い。それが当たり前であり、対価の対象となる労働とは見なされてこなかったわけです。

2000年4月に開始した介護保険制度は、家庭内の労働を外部化し、正規の労働とする一歩と

なりました。しかし人材を海外から迎え入れるとなれば、まだまだ多くの課題があります。移住労働者か否かを問わず、介護労働の社会的評価を高め、「ディーセント・ワーク（適正な労働）」として確立していく必要があります。

1980年代初頭に始まる

移住労働者の日本への流入は女性から

労働を目的とした海外からの人材の流入は、1980年代から新しい流れを形成してきました。日本の場合、女性の流入で始まったことは、他の先進国と違うひとつの特徴といえます。

80年代初期は、フィリピンなど東南アジアの女性がエンターテイナーとしての就労ビザで来日するケースが多くを占めていました。その後、農村部、さらに都市部で国際結婚が増加。一方、男性の移住労働者は女性に少し遅れて、建設現場や工場などの就労が増加していきました。

女性移住者についてはしばしば、暴力団がらみの犯罪、もしくは風俗の問題として報道され、就労という側面から論じられることはほとんどありませんでした。近年の介護労働における海外人材導入の動きは期せずして、すでに日本に定住して

社会学研究科教授

伊藤るり

(いとう・るり)

1977年上智大学外国語学部フランス語学科卒業、1979年津田塾大学大学院国際関係学研究科国際関係論専攻修士課程修了、1981年フランス社会科学高等学院社会学博士課程修了。1986年～1997年、明治学院大学国際学部専任講師・助教授、1992年～1993年メキシコ大学院大学客員教員、1993年～1994年フランス社会科学高等学院歴史研究センター訪問研究員・在外研究、1995年～1997年明治学院大学国際平和研究所主任、1996年～1999年お茶の水女子大学ジェンダー研究センター客員研究員、1997年～2000年立教大学社会学部社会学科教授、1997年～明治学院大学国際平和研究所客員所員、2000年～2007年お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授、2007年～一橋大学大学院社会学研究科教授。

いる女性移住者の就労の問題をも引き出すという側面をもっています。

介護を正当に評価される労働とする 枠組をどうつくるか

日本は経済連携協定（EPA）の枠組のなかで、インドネシア（2008年開始）とフィリピン（2009年開始）から看護師や介護福祉士候補生を受け入れてきています。農業や製造業を対象としたEPAのなかに初めて人の自由な移動を組み入れたといえますが、モノをつくる労働と、人と人との関係性のなかで行われる再生産労働を同じ文脈で読み解くのはもともとムリがあります。また、本格的な就労のためには、日本人と同様の国家試験をパスしなければならないなど、いまの仕組みは、働きにきたい者にとってハードルがきわめて高い状況です。

他方で、職業としての歴史が長い看護師に比べて、介護は職業としての歴史が浅く、その社会的地位がまだ十分に確定していないという点も見逃せません。

重要なのは、冒頭でお話した通り、介護を社会的に評価される労働として認める仕組みを考

え、そうした認識を社会全体に広げていくことです。たとえば、フランスには雇用主団体と労働組合が結ぶ職業別の全国労働協約があり、家事・育児労働も休暇や社会保障を含め、労働条件が明記され、これは移住労働者にも適用されます。イタリアにもこうした仕組みがあるようです。これらの国にも、非正規移住労働者の問題などがありますが、移住労働者は少しでも条件が整っている国へ向かいたいと思うでしょう。日本もまた、海外から人材を受け入れるのであれば、受け入れ側の論理だけでなく、働く側の視点を大事にする必要があります。

マルチリンガルな研究チームで ヨーロッパの状況に迫る

いま「国際移動とジェンダー研究会」の仲間とフランス、イタリア、ドイツの科研費による共同研究をしています。フィリピン、アフリカ、東欧など、じつに多様な地域から家事やケアに携わる人が数多く流入していることがわかります。

そこで私たちは、さしあたり日本にも多いフィリピン人労働者に注目しつつ、各地で彼女たちがどのような条件で就労しているのか、またアフリ

カ出身者や東欧出身者などのように異なる就労状況にあるのかなどを、マルチリンガルな研究チームを構成して共同で調査研究しています。そうすることで、再生産労働のグローバル化という人類が直面している現代的課題をひもといていきたいと思っています。（談）



パリの対人サービス・フェアに集まったフィリピン人家事労働者と支援者（撮影：2010年11月）

三商ゼミ
60周年
三商大戦
50周年
特集

60年の伝統を学生たちが守る 「三商ゼミ」の今

※2010年の三大学によるゼミの正式名称は「三大学
学生研究討論会」です。正式名称とは別に、「三商大
ゼミ」、「三商ゼミ」などの通称が使われてきました。
今号では、ゼミの名称を、現在大多数の学生が使う
「三商ゼミ」の通称で記させていただきました。

2010年、60回目を迎える「三商ゼミ」は、例年とは少し違った雰囲気の中でスタートしました。

主幹校は一橋大学。開催日程は、11月27日、12月4日、5日の3日間でした。

初日の午前10時40分、「三商ゼミ」に先だち、60周年記念式典が開催されたのです。

学生による学生のための 三大学合同研究発表会

以下、『ヘルメス』の記録を引用します。「三大学合同研究発表会」は今から5年前の昭和26年（1951年）に、大阪市立大学、神戸大学、それに本学を加えた伝統を誇る『旧三商大』が、商学、経済学、法学の各分野にわたって互いにその研究成果を発表し合い、討論をかわし、意見を交換することによって『三大学』のより一層の発展、より一層の交流を目指すことを目的として発足したものであり、その第1回の発表会は同年、大阪市立大学に於いて開催された。第4回目迄は『三商大研究発表会』という名称のもとに、毎年当番校をかね、第2回は神戸大学、第4回は再び大阪市立大学、そして昨年・神戸大学で行われた第5回目から『三大学合同研究発表会』と名称をかね、同時に研究発表部門の拡張なら



学生編集による学術情報誌『ヘルメス』8号（1956年発行）では、「三商ゼミ」を特集している。

びに一部門二テーマ制（共通テーマと個別テーマ）の確立を申し合わせ本年にいたったものである。」（3回目の開催地は一橋大学と推測されます。『ヘルメス』8号・1956年発行）。

1951年に学生によって発足し、以来学生の手で運営されてきた「三商ゼミ」ですが、2010年は60回目を記念して三大学による記念式典が一橋大学佐野書院で開催されました。式典は杉山

一橋大学長（当時）の式辞で始まり、神戸大学の萩原経済学研究科長、大阪市立大学の脇村経済学研究科長からの祝辞が続きました。三大学の要人が一堂に会し、「三商ゼミ」のために式典が開かれた例は、近年の記録にはありません。会場に集まった100人を超える学生にとっても、新鮮なことだったようです。



「三商大」が消えてもなお 「三商ゼミ」が残る

1956年発行の『ヘルメス』8号に見られるように、三大学による合同研究発表会は「三商大研究発表会」という正式名称のもと、1951年に1回目が開催されました。その後1955年に、「三大学合同研究発表会」と正式名称を変更



* 1955年と推測されます。

します。その後何度名称変更が行われたかは、定かではありませんが、2010年の正式名称は、「三大学生研究討論会」となっています。しかし学生たちにとって、「正式名称」はあまり大きな意味を持っていないようです。2010年の「三商ゼミ」の運営を担当する3校の学生代表に、正式名称についてたずねたところ、ほとんどの学生は知らないだろうとの答えが返ってきました。知っているのは、「三商ゼミ」なのです。

戦後三商大は新制大学へと生まれ変わり、それぞれに大学名が変わりました。三商大の名前が歴史のなかに消えて去ってから60年以上が経過しています。しかし今日においても、学生たちは通称である「三商ゼミ」にこそ強い愛着を感じているのです。

16の「三商ゼミ」が一橋大学で、8つの「三商ゼミ」が関西で開催される

「三商ゼミ」といっても、全てのゼミが3校参加で行われるとは限りません。例えば一橋大学から2つのゼミが参加し、神戸大学、大阪市立大学からそれぞれ1つずつが参加し、合計4つのゼミで行うというケースもあります。または、神戸大学から1つ、大阪市立大学から1

●2010年「三商ゼミ」マッチング表（一橋大学開催分）

	一橋大学	神戸大学	大阪市立大学
11月27日(土)	挽ゼミ	加登ゼミ	岡野ゼミ
	石川城太ゼミ	菊地ゼミ	
	高柳ゼミ	天野ゼミ	大島ゼミ
	高田ゼミ		玉井ゼミ、ウェザースゼミ
	奥田ゼミ	久保ゼミ	田畑ゼミ
	加賀谷ゼミ		浅野ゼミ、石川博行ゼミ
	尾畑ゼミ	國部ゼミ	向山ゼミ
		中村ゼミ	海老塚ゼミ、熊倉ゼミ
	島本ゼミ	原ゼミ	狩俣ゼミ
12月4日(土)	山内ゼミ	村上ゼミ	
	本庄ゼミ		恒光ゼミ、三島ゼミ
	清水ゼミ	地主ゼミ	
	橘川ゼミ	黄ゼミ、松嶋ゼミ	中瀬ゼミ
	小川ゼミ	藤田ゼミ	西倉ゼミ
12月5日(日)	本庄ゼミ		恒光ゼミ、三島ゼミ
	小川ゼミ	藤田ゼミ	西倉ゼミ
	松井ゼミ、山下ゼミ	南ゼミ	田村ゼミ
	浅見ゼミ		朴ゼミ、脇村ゼミ
関西開催の三商ゼミは全部で8つあります。		中川聡史ゼミ	長尾ゼミ、鈴木ゼミ
		三谷ゼミ	福原宏幸ゼミ、下崎千代子ゼミ
		入谷ゼミ	瀧川ゼミ、中川健吾ゼミ
		玉岡ゼミ、入谷ゼミ	松本淳ゼミ
		鈴木純ゼミ	滋野ゼミ
		正司健一ゼミ	西村弘ゼミ、本多哲夫ゼミ
		松尾博文ゼミ、高嶋ゼミ	富澤修身ゼミ
		宇南山ゼミ、水谷ゼミ	砂原康介ゼミ

つのゼミが参加し、2校間で実施することもあります。この場合、関西の2校はわざわざ東京に遠征する必要はないため、ゼミは関西で開催されるケースがほとんどです。2010年は一橋大学を会場として16のグループ、関西で8つのグループが「三商ゼミ」を行いました。それぞれの大学からいくつのゼミが参加し、どのような組み合わせで行われるのか、そのカギを握るのがマッチングです。まず各校の「三商ゼミ」担当者は、

参加意思の有無や発表テーマについてヒアリングをします。その結果をもとに、参加するゼミをカテゴリ別に分け、研究領域の近いゼミ同士のマッチングを行います。再度それぞれのゼミとの最終調整を行います。その結果、2010年は右図のようなマッチングができあがり、60回目の「三商ゼミ」は全部で24の研究発表討論会が行われることになりました。ちなみに学部別の参加ゼミの内訳は次のようになります。一橋大学からは商学

神戸大学経営学部村上ゼミは「マルチマーケットコンタクト理論」をテーマに、航空会社の事例研究を発表した。

一橋大学商学部山内ゼミの発表テーマは、「スマートグリッド」。再生エネルギー、ICT、蓄電池という3つのアプローチから研究発表を行った。

「三商ゼミ」に向けての予行演習風景。一橋大学商学部山内ゼミにて。



「三商ゼミ」担当者からのコメント



一橋大学商学部3年
山内弘隆ゼミ所属
水井佑輔さん

「三商ゼミ」は、学生主体の行事であるため、運営のノウハウがしっかり引き継がれておらず、開催まで苦労が絶えませんでした。しかし、3大学合計100人以上の学生の参加をもって行った60周年記念セミナーはとても感慨深いものでした。列席してくださった一橋大学長を含む各大学の先生方には大変感謝しております。今後も学生と大学が協力しながら伝統を守っていければ素晴らしいと思います。



神戸大学経営学部4回生
平野光俊ゼミ所属
隅野康太さん

私の所属ゼミは、毎年同じゼミを相手に合同ゼミを行っています。そういう意味では、「三商ゼミ」は、ゼミ同士のつながりの記録でもあるのです。神戸大学では、全てのゼミが参加しているわけではないので、学生によって温度差がありますが、「三商ゼミ」を就職活動より優先させるほど、夢中になっている人もいます。お互いに刺激しあえる「三商ゼミ」には、それだけの魅力があると思いますね。



大阪市立大学商学部3回生
中瀬哲史ゼミ所属
壁下桃子さん

「三商ゼミ」はとても良い刺激になりました。同じ領域の研究にも色々なアプローチがあることを学びました。完成度の高い研究発表もあり、同世代として新鮮な驚きを感じました。大阪市立大学では「三商ゼミ」をゼミ活動のハイライトと考えている学生が多いので、早いうちから委員会を組織し、準備を整えて臨んでいます。素晴らしい伝統ですので、しっかりと引き継いでいきたいと思います。

大阪市立大学の学生たち。



「三商ゼミ」終了後の記念撮影。この後3校の学生たちは、交流会会場へ向かった。



一橋大学と神戸大学の教授と学生たち。

そして、伝統は引き継がれる

部9ゼミ、経済学部3ゼミ、法学部2ゼミ、社会学部2ゼミの合計16のゼミが参加することになりました。神戸大学からは、経済学部12ゼミ、経営学部11ゼミの合計23ゼミが、大阪市立大学からは、商学部13ゼミ、経済学部13ゼミ、法学部4ゼミの合計30ゼミが参加しました。

「三商ゼミ」は、3校の学生によって継承されている学生イベントですが、それぞれの大学ではどのように継承され、運営されているのでしょうか。まず一橋大学ですが、ここ数年は1人の学生が担当しているとのことでした。前任者から

「三商ゼミ」の概略説明を受け、引き継ぎ資料として全学のゼミの連絡網と神戸大学、大阪市立大学の担当者の連絡先を渡されるといった極めてシンプルな仕組みで引き継がれていました。2010年は主幹校でしたから、毎年行う関係者との連絡、調整業務に加え、教室の手配などの作業がありました。一方神戸大学は、経営学部、経済学部、法学部の各学部の代表1名ずつが運営に携わっています。大阪市立大学はというと、かなり組織的です。「三商ゼミ」委員会が組織されており、商学部、経済学部、法学部の全てのゼミ内に「三商ゼミ」担当者がいます。委員長が全体をまとめ、書記が一橋大学、

神戸大学との連絡役を務めます。2010年、3校の打ち合わせは、全て携帯電話とメールで行われました。結局3校の担当者同士は、最後まで一度も顔を合わせるチャンスがなかったのだそうです。それでも学生たちは、迷わず指定された教室に向かい、時間がくれば自然に研究発表が始まります。12月5日、60回目の「三商ゼミ」も、大きな混乱もなく無事終了しました。3校の連携の良さもさることながら、学生たちの「三商ゼミ」に対する特別な思いが、伝統を支えているのでしょう。

※引用文中の旧仮名づかい、旧漢字は、現代表記に改めました。

60年の伝統を学生たちが守る「三商ゼミ」の今

60代はまだまだ現役

喜寿などものともせず

80歳の坂を越えてなお進む

前進できぬ 意志はない

気軽に「第二の人生」などとは、

決して誰にも言わせまい

特集



My choice

詩吟のプロ吟詠家
飯島満氏・77歳



蜷川幸雄演劇集団の役者
関根敏博氏・80歳



大学院博士課程で学ぶ
湯川真人氏・67歳



【詩吟吟詠家】飯島満氏の

「人生80年時代」

詩吟と出会い
奥の深さに魅せられる

如水会館でお会いした飯島満さんから、3枚の名刺をいただいた。

1枚目は「横浜如水会 相談役 飯島満」。2枚目は「無双流氣汪^{きわう}会会長 飯島氣汪」。これには、ティチク吟詠協会専属吟詠家、横浜市吟剣詩舞道連盟理事と記されている。3枚目は「飯島氣溢^{きえつ} 歌謡吟詠『若き日の謙信』」である。

1枚目について、説明は不要だろう。2枚目、3枚目は、飯島さんが詩吟の吟詠家と歌手、つまりその道の「プロ」であることを表している。「氣汪」は詩吟の雅号。「氣溢」は歌謡吟詠歌手の雅号である。

「私が子供の頃、伯父が詩吟をうっていた。当時の定年は55歳。定年を迎



えたとき、さてこれから何をしようかと考えたのだが、伯父のことが頭にあったからか、カルチャーセンターの詩吟教室に入りました」

ただ、それほど詩吟にご執心であつたわけではなく、「3カ月でやめようと思つていた」という。

「ところがやりますと、奥が深い。まず、アクセント。正確かつはっきりとした言葉で朗々と吟じなければならぬい。そこに惹かれました」

講師は、日本詩吟学院の吟詠家。飯島さんは素質があつたらしく、トントン拍子に昇段し準師範から師範試験に合格。カルチャーセンターに通い始めてから13年後、2001年のことだった。「早いほうでした」と語る。飯島さん、68歳。

「私は研究熱心でのめり込むタイプ。試験を受けて昇段すると、さらに詩吟の難しさ、奥の深さがわかってくる。



1つのステップを上がるごとに次のステップが見えてくるわけです。よく『壁に当たる』と言いますが、私は前向きなタイプなので、壁があれば乗り越えてやろうということで、悩むよりはかえって意欲がわきました」

準師範になれば教場（詩吟教室）を開き、生徒に教えることができる。1997年64歳、飯島さんは、自宅に教場を開いた。

「教育、Educationとは、単に教えることではなく、その人の能力を引き出すこと。生徒には個人差があります。一人ひとりの個人差に応じて、詩吟に対するその人の実力を最高の形で引き出してあげたい。それを心がけてやっているから、教えることがとても楽しいですね『教えることは又教わること』でもあります」

喜寿にして プロ歌手への道も拓く

飯島さんは、1955年に一橋大学経済学部を卒業し三菱銀行に入行した。配属先は、丸の内支店。幹部候補生であった。入社5年目に、あこがれていた貸付部門に異動。ここまでは、順風満帆であった。しかし……。

「貸付業務は、大変に忙しかった。私は責任感が強く、早く仕事をマスター

しようと考えあまり自分を追い込んでしまった。それで結局ダウン。うつ病でした」

およそ半年の療養期間をへて復帰したが、完治はしていなかった。ポストが変わるたびに症状に悩まされた。この繰り返しで定年を迎えたのである。

「バツとした銀行員生活ではなかったが、それは致し方ない。もし人生50年代だったら、私は何も足跡を残さな



れません。現在は男性でも人生80年時代になり、これに救われました」

詩吟を同伴者として人生を歩む飯島さん。2001年には仲間と「無双流」を立て、自身の組織「氣汪会」を運営している。また、2003年には「如水詩吟会」を立ち上げ、月に2度、如水会館で指導を行っている。さらに、2010年、歌謡吟詠アルバム『吟の華』のCDを7名と共同でリリース。「若き日の謙信」という曲を吟じた。飯島さん、喜寿にして吟詠歌謡のプロへの道も拓いたのである。

「竹中平蔵さんが『人生2つくらいの目標を持ったほうがよい』と言っているが、そのとおりだと思います。私の場合、詩吟だけでなく横浜如水会の支部長、相談役として、

会員の拡大などに力を尽くしてきましたが、これからも支部の発展に寄与していくことが目標です」

人生80年。「せかせかと自分を追い込むのではなく、ゆっくりとやりたいことをやっていきたい」と飯島さん。80年といわず、さらにその先が楽しみな人生模様である。



月に2度、如水会館で「如水詩吟会」の指導を行っている。

特集



My choice



飯島 満氏
Mitsuru Iijima

奥さんとともに（1987年）。



三菱銀行勤務時代。



- 1988年 三菱銀行定年退職。詩吟を始める（日本詩吟学院に所属）。
- 1997年 準師範試験に合格。自宅にて教場を開き指導を始める。
- 2001年 日本詩吟学院の師範位取得。前後して、無双流を起す。同流・氣汪会会長。雅号は氣汪。
- 2002年 テイチク吟詠協会専属吟詠家。
- 2003年 「如水詩吟会」を立ち上げ指導にあたる。
- 2010年 CD『吟の華』をリリース。プロの吟詠歌手として本格的デビュー。横浜関内ホールで披露。

「舞台役者」関根敏博氏の

「妻のあと押し」

狭き門を突破し 蜷川劇団の役者に合格

関根敏博さんは、55歳以上の劇団員で構成される「さいたまゴールド・シアター」のメンバーである。率いるのは、蜷川幸雄氏。活動拠点は、彩の国さいたま芸術劇場だ。

その日は、週1回の稽古日。芸術劇場小ホールでの2時間の稽古終了後、関根さんにお話をうかがった。

「私は芝居が好きで、特に蜷川さんのファンでした。2006年2月、この劇場で上演された氏の『間違いの喜劇』（シェークスピア作）を観た際、チラシのなかにゴールド・シアター団員募集のものがありました。しかし興味を覚えたものの、すぐに応募しようと思っただけではありません」

そんな関根さんにオーディション参加を決意させたのは、奥さんだった。



「私の芝居好きをよく知っている家内が、『やってみたらどう』と言ってくれ、そうかなという気になりました。応募したの

は家内のあと押しのおかげですね」

もつとも、オーディションへの応募を決めることと受かるかどうかは別問題。オーディションへの応募者は、募集枠20人に対し1200人以上。この時点で倍率60倍と、「超」がつくほどの狭き門だった。

「応募者一人ひとりに課題が与えられました。私がもらったのは、リア王のセリフ。嵐の夜に我を失ったリア王が彷徨する有名な場面です。セリフの量は、400字詰の原稿用紙1枚分ほどだったでしょうか」

オーディションまでの期間は、約1カ月。原稿用紙1枚分とはいえ、演技の経験などまったくなく、加えて76歳で記憶力が衰え気味の関根さんにとっ

て楽なことではない。「自信はまったくなかった」そうだが、ここでも奥さんが支えてくれた。

「家内が聞き役になってくれ練習しました」と関根さん。オーディションは、蜷川氏が応募者全員の選考に立ち会うなか、2週間にわたって進められた。

「オーディションは個別でした。蜷川さんほか数人の審査員の前でセリフを披露します。蜷川さんは何も言われな

家族が支えてくれる 80歳の役者人生

関根さんの一橋大学入学は遅かった。1930年、高田馬場で生まれた関根さんは、20歳から6年間、埼玉県熊



関根敏博氏
Toshihiro Sekine

1930年 東京生まれ。
1950年～1956年 熊谷市の中学校で教鞭を執る。

1957年～1962年 熊谷市で私塾経営。

1963年 一橋大学経済学部入学。
1967年 同学部卒業。

NEC（日本電気株式会社）の関連会社NED（株式会社ニューエクスレント・データ）に入社。

1968年 東洋大学の教員に転職。



東洋大学教員時代。工学部のゼミ学生とともに。

2000年 東洋大学定年退職。
2006年 蜷川幸雄率いる55歳以上の劇団員からなる「さい

たまゴールド・シアター」のオーディションに合格。同年、初舞台に立つ。

2010年 9月、第4回公演。毎年1度の公演にはすべて出演している。

谷市で中学校の教員として勤務した。1956年に教員をやめた関根さんは、5年間の私塾経営をへて、33歳を迎える年、経済学部に入學した。

「小説家を志していたのですが、やっていて重要なことに気がつきました。作家になるような人は、三度の食事より書くことが好きという体質でなければなりません。私はそこまでの人間ではありません。結局、作家は断念することにし、大学へ行くことを考えました」

一橋で関根さんは、統計学を専攻した。

「そのおかげで、NECの関連会社にコンピュータのエンジニアとして入社することができました」

関根さんの業務は、NECのコンピュータを購入したユーザーのもとに向き、必要とする作業が行えるよう支援することだった。就職した1967年といえば、日本ではコンピュータの



黎明期。もともと安価なものでも千万円単位の価格であったという。翌年、関根さんは東洋大学に教員として転職した。

「東洋大学でコンピュータを購入してもらったのですが、学生に教えられる人がいない。そこで私に白羽の矢が立ったのです」

以後、2000年に70歳で退職するまでの32年間、関根さんはコンピュータの講座を担当し続けた。黎明期から発展期、そして成熟期まで、教育の場でコンピュータに携わった関根さんは、充実した教員生活を送った。では、役者人生はどうなのだろう。

「舞台では、自分以外の人間を演じます。いかに自分を消して役の人物になれるか。そのことに魅力を感じます。ただ、記憶力の



ことがあり、セリフを覚えるのには苦勞します。しかし私の場合、幸いなことに家内が相手をしてくれるので助かります」

公演は年に1度。2010年まで、4回の公演には、奥さんだけでなく息子さんも劇場に来てくれた。

「お父さん、声がよく通るよと息子が言ってくれました」と嬉しそうな関根さん。家族が支えてくれる役者人生である。

特集



My choice



「大学院生」湯川真人氏の

「探究の旅」

62歳で修士入学し

「近世思想史」を研究

湯川真人さんは、1943年生まれの67歳。現在、社会学研究科博士課程に籍を置く大学院生である。ただし、一橋のOBではない。

湯川さんが学んだのは、東京大学。1968年、教養学部教養学科を卒業、日本興業銀行に入行した。興銀では、調査部や海外留学をへて資産運用を担当。そして1991年、J・Pモルガン信託銀行に転職して以後、90年代のほとんどの期間、外資系金融機関の経営陣の1人として資産運用の指揮を執ってきた。

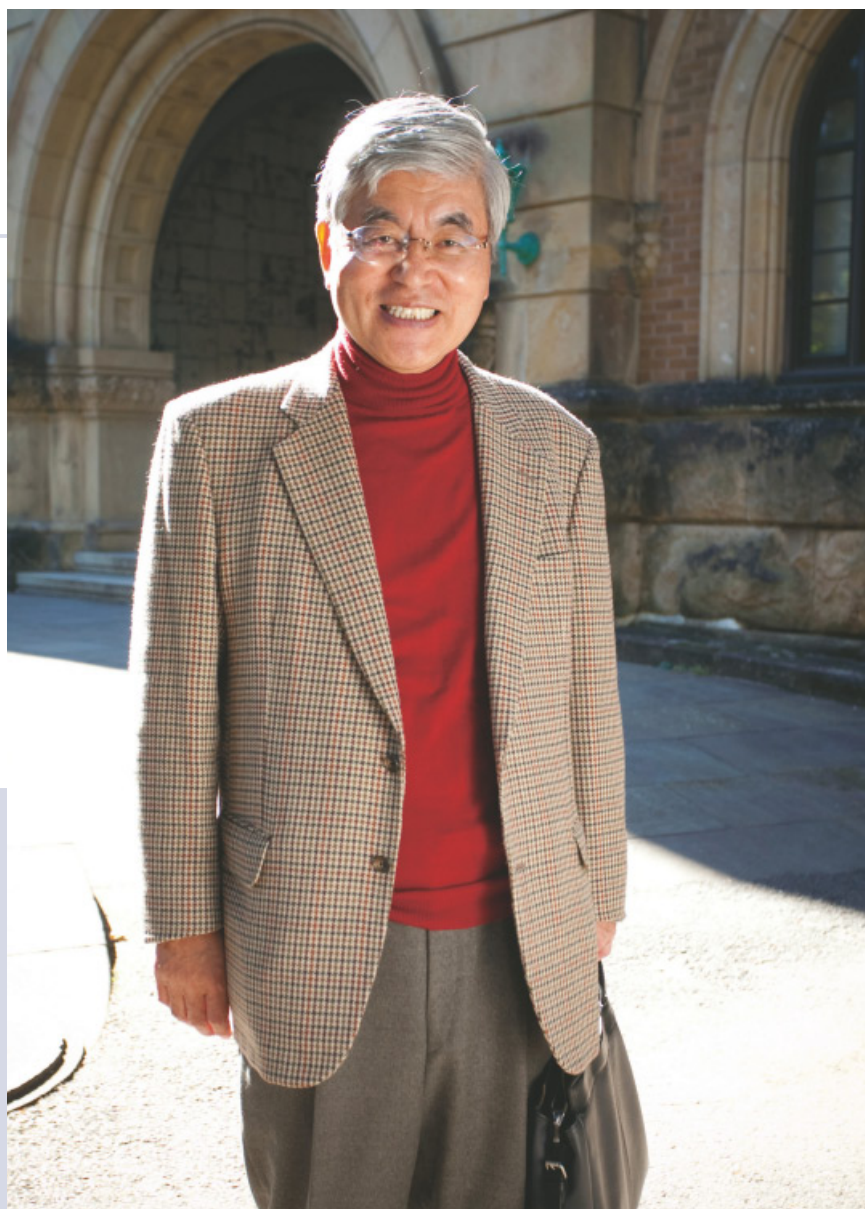
湯川さんが37年に及ぶビジネスマン生活に区切りをつけたのは、2004年9月である。翌年4月、言語社会研究科に修士入学。研究分野は「近世思想史」で、実際の指導は社会学研究科の若尾政希教授から受けた。湯川さんは、なぜ、近世

思想史を研究対象にしたのだろう……。

「私は高度成長の加速期からバブル崩壊まで、興銀で日本企業を見続けてきました。そして90年代、バブル崩壊による『失われた10年』の期間は、ほぼ外資系金融機関で日本企業を見てきたのです」

湯川さんによると、バブル以前と以後では、日本企業が「大きく変質している」という。

「資産運用で株式投資をする場合、企業そのものを理解しなければなりません。それは、調査項目に数字をはめ込むだけでわかるものではありません。数字



の中身は何かというところまで踏み込む。また、経営者、財務担当役員などの方々に会い、話をするこで企業を理解

する。バブル以前、どの日本企業にも独自のカルチャーがありました。働く人も、その企業文化のもと、自分の仕事に社会的意義を見出そうと活動していたと思います。そこには、会社への忠誠心も存在しました。一方、アメリカの金融機関は、ビジネス面で洗練されていますが、人が盛んに移動する。その分、会社に対する帰属意識は低いわけです。バブル以後の日本企業は、そのどちらでもない。私がアメリカの金融機関から日本企業を見て痛切に感じたのは、今後の日本の企業文化はどうなるのだろうか、ということでした」

ここから、湯川さんの「探究の旅」が始まった。

大学院大学の学長業が多忙のため院を休学中

「探究の旅」とは、決してレトリックではない。論文作成の調査のため湯川さんは、山形県鶴岡市へしばしば旅したからである。

湯川さんが言語社会研究科に提出した『研究計画書』に次のような記述がある。「（バブル崩壊後の）経済社会の大きな環境変化のなかで、私は自分の国について、また自分の文化的アイデンティティについて自問自答することがしばしばあ

った。それは自分自身の存在意義となっていた企業文化の喪失と、日米の職場で体験した彼我のカルチャーギャップの体験からくるものであり、私に日本人とは何か、日本の本来の企業文化とは何かを考えさせる大きな契機となった」

湯川さんは、「日本人とは何か、日本の本来の企業文化とは何か」を説明するにあたり、対象を江戸時代中期（18世紀から19世紀初頭）に据えた。

「その頃、大阪に懷徳堂という儒学を教える塾がありました。懷徳堂では数多くの商人が学んでおり、たとえば、富永仲基や山片蟠桃の著作を読む



と、その知的レベルが相当高いものだったことがわかります。また、19世紀の初めには大分県の日田に咸宜園^{かんぎ}というやはり儒学の塾があり、ここには江戸時代だけで日本全国から延べ4000人ほどの入門者が集まりました。このように、江戸時代は人の往来がかなり自由だった。ですから18世紀以降の日本は、全国の様々な地

域で智の集積が行われ、それが海のように広がっていた時代ではなかったのか。さらに、日本の企業文化は、その智の集積を源泉としているのではないか。私はそのように考えました」

湯川さんは、調査地域を庄内（鶴岡市）に特定した。注目したのは、佐藤東蔵（1758〜1808）という名主である。そして佐藤家の五峯館に収められた蔵書を核に、修士論文『江戸中後期における豪農層に見る思想と活動——佐藤東蔵貞教を事例として——』を書き上げた。この論文は、日本の企業文化の源泉につながるであろうこの時代の思想と活動を明らかにするためのいわば序論であり、さらに研究を進める

べく湯川さんは社会学研究科の博士課程に進んだのである。しかし……。

「一昨年（2008年）、私も設立にかかわった新潟県のビジネススクール、事業創造大学院大学の学長に就任しました。やらなければならぬことが数多くなり、論文を書く

ための勉強時間が取れなくなりました。現在は休学させてもらっています」残念ながら研究活動は、開店休業状態。しかし時期はともかく、湯川さんの「探究の旅」は、必ず再開されるに違いない。

特集



My choice

- 1991年 J・Pモルガン信託銀行 取締役就任。
- 1999年 興銀第一ライフ・アセットマネジメント常務取締役就任。
- 2001年 シティトラスト信託銀行 代表取締役社長就任。
- 2005年 一橋大学大学院言語社会研究科に修士入学。
- 2006年 事業創造大学院大学副学長に就任。
- 2008年 同大学学長に就任。
- 2011年現在、一橋大学大学院社会学研究科博士課程に在籍中。

ルクセンブルグ時代。ルクセンブルグから約40キロ離れた、ドイツワイン発祥の地とされる世界遺産の街トリアアにて。



湯川真人氏
Masato Yukawa

1943年 新潟県生まれ。
1968年 東京大学教養学部教養学科卒業。
日本興業銀行に入行。

Captains

連載企画

一橋大学草創期。

そこには、新しい価値を創らんとする力があつた。建設者としての誇りと意志があつた。

「Captains」それは近代日本の発展に多大なる功績を残した人々のストーリーである。

学問、国、家業、大学運営……有事のたびに求められた人格。

「Captains」第7回では、堀光亀の足跡を追ってみた。

第7回

堀 光 亀



渡辺弘行／作

紛擾ふんじょうの矢面やめんに立ち、

一橋の黎明を支えた

陰の立役者

堀光亀が東京高等商業学校、東京商科大学で教鞭をとっていた時代は、一橋大学が国内随一の社会科学の最高学府として成長を遂げていく、まさに黎明の時代です。明治・大正・昭和を通じて、高等商業学校に入学（1895年）以来、東京商科大学教授を退官する（1937年）まで、実に42年間、一橋に籍を置きました。

しかしながら、同時代、一橋を牽引したとされる福田徳三、佐野善作、上田貞次郎、三浦新七などと比して、その功績は著名ではありません。博士号の学位を取得していない、学長に就いていないことなどにその要因を求めることができますが、東キャンパス東本館脇にある胸像は、1941年、没後直ちに第一回専門部卒業生たちの手により建立されています。

さらに、学園の功労者を顕彰する学内の肖像画は、堀光亀の実弟である洋画家・石河光哉いしにの手になるものが多く、これも堀が当時の学校経営に深く関わっていた証ではないでしょうか。

ある時は政府から、ある時は学生あるいは同僚の学者から、常に大学運営者として、紛擾の矢面に立ち、事の収拾に尽力した堀光亀は、学者があまり持ちえていない学校経営者としての能力に光るものがあります。

Captains 堀 光亀

学園存亡の危機に、悉く直面

堀光亀は1876年、長崎県・島原の地に、島原藩士石河光英の子として生を受けます。幼少期に縁戚にあたる島原の名家堀家に養子として出され、堀姓を名乗ります。

長崎市立商業学校を卒業後、高等商業学校に入学。成績は特に秀で、本科3年生の時、三浦新七などとともに商工業実況取調べの修学旅行を命じられています。この旅行で堀は台湾に赴き、台湾の商業情勢を見聞。帰学後、全学参加の学生会で台湾の現状を報告しています。専攻部卒業と同時に講師となり、2年目の1903年に英国、ドイツ、米国に留学します。かの地では交通業研究に勤しみますが、特に海運に関する研鑽を積み、日本の海運学創設者といわれています。

1908年、帰国した堀は東京高等商業学校の教授となります。以後、1915年文部省督学官を兼任。1920年、東京商科大学昇格に伴い同大学教授。1927年、専門部主事に任命されました。退官まで三十数年間、母校に勤務しました。

この三十数年の間、高等商業学校から商科大学への昇格という激動の渦中に身を置き、申酉事件、籠城事件、白票事件など、度重なる紛擾が起きますが、そのすべてに堀は巻き込まれています。学校運営者という立場上、巻き込まれるという表現は適切



堀 光亀

肖像画は全て堀 光亀の実弟である洋画家・石河光哉作



根岸 信



Hare, Alexander Joseph



内池 廉吉



山口弘一



吉田 良三



関 一

ではないかもしれませんが。しかし、その都度、政府からの偏見、いわれのない中傷や学生からの突き上げ、さらには退官前の専門部主事更迭など、本意とはかけ離れた仕打ちを受ける様は、「巻き込まれた」という表現こそ、言い得ているように感じます。

『商業大学必要論』で、 商科大学昇格の要を説く

堀の遺した功績の一つに『商業大学必要論』の執筆があります。1901年から1902年にかけて、商科大学設立の必要を訴えた「ベルリン宣言」を起

業学校の大学昇格待望論が熱を帯びてきます。

堀や上田貞次郎、津村秀松、左右田喜一郎らも続いて帰国し、東京高等商業学校の教授陣は、新進気鋭の布陣となります。彼らは皆、「実学」「技術」を一步突き出た「研究」こそ、日本の商工業繁栄に繋がると確信していました。

1907年、貴族院に「商科大学設立に関する建議案」が提出されました。これを受けて同窓会を中心に商科大学昇格運動は最高潮に達します。社会の耳目も引くようになり、早急に商科大学の編成、学科目などについての意見をまとめる必要に迫られました。

堀光亀は、帰国後直ちに『商業大学必要論』を執筆。『同窓会雑誌』五十号に掲載しました。しかし

商科大学昇格にはこの後、10年以上の年月を待たねばなりません。1908年から1909年にかけての申西事件にはじまり、一橋と文教の府は対立を繰り返します。また、学内においても、昇格後の方向性が一致せず、いたずらに議論のみを繰り返すという雌伏の時代が続きます。いずれにせよ、東京高等商業学校が大学に昇格するためのメルクマールとして、堀の『商業大学必要論』は必要欠くべからざるものであったことは確かなようです。堀は序文で次のように述べています。

「吾人が商業大学の設立を望む所以のものは、徒らに大学という名称に拘泥するが故にあらず、名実兼備せる商業大学の制度を確立しこれを設置するに在り。すなわち商業に必要な高等の学術技能を授け、その蘊奥を攻究することを目的とする最高商業教育

機関の設立を希望するに在り」

そして、最高商業教育機関は、日本でもすでに存在する。それが東京高等商業学校であると続けます。その理由として、すでに東京高等商業学校は帝国大学と同じく、専攻部を卒業した者は学士の称号を得ている。実質的に大学と同等の教育を受けているのであるから、東京高等商業学校を商業大学として制度化するべきであると説きます。

「虎を描かんとして

猫に類するの愚をなすべからず」

さらに、商業が未熟な時代では、算術に通じ、文筆を弁え、丁稚番頭としての単純な経験と、才能と運命によって営利の道を講ずるしかありませんが、平和の力と交通運輸の技術、生産機能の増進、人々の欲望の膨張により、世界経済が発展していく現代では、「商工業の規模は著しく拡大し、経営亦昔日の如く単純ならず。その間に処してよく輸贏（ゆえい）（※原文ママ）を決つせんと欲せば、世界の大勢を達観するに足る見識と営業活動を処理する能力を有する指導的人物を必要とする事の切なる、まことに今日の如きはなく。（中略）一国の富は資本、労力、生産材、これが運用にあたる人物によって増進せらるるものなり。商業に最高教育機関の必要なる所以斯くの如し」

と述べ、世界経済に追いつくために高度な経済・経営の学究機関の必要性を訴えています。本論は、続いて、世界の最高商業教育機関を列記、ドイツ、北米、英国、フランスの各商業大学を紹介しています。

終章では、商業大学が日本にとってなぜ必要であ

るのか、また、なぜ実現を急ぐべきなのかを、次の5つの論点に絞って解説しています。

- 一、経済状態の発展に伴ない商業大学の必要あり
- 二、商工立国を国是とするが故に商業大学の必要あり
- 三、先進欧米諸国と遠隔の地にあり、それより生ずる不利を補うため商業大学の必要あり
- 四、商人の品格を高め且つ賤商の弊を矯むるため商業大学の必要あり

五、人物経済上より商業大学の必要あり」

結びの言葉には、堀光亀の商業大学設立の決意がにじみ出ています。

「これを要するに創業の困難は、吾人とても之れを認む。さればとて決して姑息に流るべからず。正当の理由、目的にして存する以上は勇往果敢、正々堂々之れが実行を期せざるべからず。伯林の商業組合長が伯林商業大学の創立式に臨んで喝破したるが如く、『予は完全なる大学を創めん、然らざればむしろなきに如かず』と。要は虎を描かんとして猫に類するの愚をなすべからず。豈、鑑みざるべけんや」

大学昇格に向け、 実務家として奔走の日々 韻松亭異変

東京高等商業学校が東京商科大学に昇格するのは、1920年のことです。4月1日の開校を前に学内の準備は万端、と誰しも推察するに難くありませんが、実際は大学のビジョンすらコンセンサスを得ていませんでした。学則は佐野善作（高商校長から初

Captains 堀 光亀

代商科大学学長）が取りまとめたとはいえ、その中身は1915年に編成された高等商業学校専攻部の学科目を踏襲したものに過ぎなかったのです。

2月のある日、この学則に憤懣した福田徳三の爆弾宣言『東京商科大学規則草案修正意見書』が、校内掲示場に掲げられました。学内外に名声を轟かせる一橋の至宝の突然の宣言は、学生たちの世論を喚起。学生有志は福田博士を囲んで懇談するとともに、新学則を絶対に阻止すべく、数多くの学生が上野韻松亭に集結しました。現場に居合わせた木全秀雄は、『如水会云報』309号に寄せた『韻松亭異変』と題した記事で、当日の様子を詳述しています。

事態収拾のため、佐野校長は堀を伴って、事情説明に赴きました。福田は演壇に立ち、

「学問の蘊奥を窮める可き我等の新大学が、必要もない必修時間が無暗に多いのは何事であるか。こんな無駄な聴講時間が多くては真摯な研究の暇などない。大学の使命は学問研究にある、学問研究の生命は自由なる自修の時間を多く持つ以外には絶対でない。一週二十時間も必修科目があつては、研究の自由など思いもよらない。今迄の専門学校その儘の古い殻をブラブラお尻に付けて、之が大学で御座いなどとはチャンチャラ可笑しくて話にも何にもなったものじゃない」などと、福田一流の明快な江戸っ子口調で論難します。さらに高じて、

「佐野君や堀君のような人達の作った新学則に対し、黙っている学生諸君からして、これから大学生などとならうとは以っての外だ。今後学問がどうの、研究がどうの、自由が何だのと口幅っ度いことをいう資格は君達には全然ない」

と人格攻撃にまで及びました。

帰りの自動車は敵味方同乗。 ただ苦笑いの堀光亀

攻撃の矢面に立った佐野は、顔面蒼白となりながらも反駁を始めます。

「多年の宿望を果す昇格を目前にして、こういう事態が起ったことは遺憾至極だが、之は以前から予期していたことである。未だ大学にもなっていない一橋に於て、一橋の何人と雖も、新大学に対して発言の権能はない。（中略）博士は必修時間を云為されるが、不肖多年の経験の結果は必修時間を少くすることは大多数の学生を従ら（※原文ママ）に野放しにする結果になる」

佐野は諄々と説いて、体調が悪いとその場を辞しました。その後、堀が演壇に立つや否や、福田はいきなり飛び出して、

「堀君は毎年、十年一日のようにノートを繰り返している。縦令一橋が大学になっても堀君は大学教授たる資格のないことを茲に宣言する」

と人格否定の言葉を放ちました。亭内に座す学生たちは、これはいへんなことになると固唾を呑みましたが、堀は笑って自席に戻り事なきを得ました。

著者は、この集会の帰途、自動車に乗った福田に声をかけられました。「山の手の方へ行くなら、乗って行けよ」。車内を窺うとなんと堀も同乗していたといひます。

「見ると福田、堀の両先生である。（中略）乗って見ると、福田博士は先刻の大嵐の模様はケロリと忘れたのかの如く、堀先生と親しく話し合っ居られる」

福田博士曰く、

「佐野君は非道いよ、上田君や君ばかり相談して僕には、唯の一言も相談しないんだろ、学則なんかどうだって好いが、あんまり僕を舐め過ぎて居るよ、君」

堀は苦笑いしながら、頷いているのみだったそうです。ここに堀光亀の人柄が如実に表れています。おそらく堀は福田の魂胆を最初から見抜いていたのでしよう。自ら非難されることで福田の憤懣は収まり、学生たちの怒りも終息する。役割として演じることができる人となります。

籠城事件

1931年9月、若槻礼次郎内閣は省廃合軍事費抑制策に失敗したのを、予算面において調整すべく、行財政整理準備委員会を設置し、極端な経費節減案を策定しました。文部省の所管では、北海道大学予科とともに東京商科大学予科および専門部の廃止案が浮上、省当局で極秘裏に進められます。

10月1日、東京日日新聞朝刊をはじめ朝刊各紙はこの廃止案を一斉に報道しました。学長の佐野は、同日午後、専門部主事の堀、予科主事・木村恵吉郎とともに、文部、大蔵両省を訪問しましたが、大臣不在のため関係者に面接し、書面にて廃止案には絶対に反対であると申し入れました。

翌日、国立本学会議室にて緊急三科連合教授会が開催され、文部省の機械的画一教育主義を打破すべきことを主張する反対理由書が作成されました。3日には、石神井予科校舍において予科学生大会、国



籠城の解散を語る学生大会（籠城事件）。

写真：『一橋大学百二十年史』

（1995年 一橋大学学術史刊行委員会／編集 一橋大学／刊）からの転載

立専門部校舍では専門部学生大会が開かれ、絶対反対決議がなされました。

白山上、神保町、一橋ルートでの抗議デモ、永田町付近での警察との衝突で数十名の検束者が出、あるいは、負傷者も複数数を数え、未曾有の学生騒擾に発展していきます。学生たちは、文部、大蔵省への陳情で反対声明を伝えますが、事態は膠着。ついに5日、故地である神田キャンパス校舎に籠城を決定しました。

事態が収拾に向かうのは10月8日午後。学生代表者5名が文部大臣と会見し「行財政整理案から予科・専門部は除外する」との言葉を得ることができました。前後して教授会代表にも同様の主旨が伝え

られています。以降、約1600名を数えた籠城学生は三々五々解散していきます。

堀光亀がこの籠城事件で果たした役割はとて大きいものがあります。自身が預かる専門部の廃止を聞いて、心底、怒りがこみ上げてきたのではないでしようか。堀が考えたのは、建学の功労者、子爵・渋沢栄一に事態収拾を依頼することです。

4日午前、如水会の藤村義宙理事長、木村、内池廉吉とともに、滝野川にある渋沢邸を訪問します。助力を求めたところ、「教育の実情を知らぬ暴挙だ。病気でなければ自分自身で各方面に運動するが、自分

に代わって中島久万吉氏を各要路に対して運動させる」との言葉を得て、気持ちを強くします。

洪沢はこの翌月に逝去しています。

不遇の退官前夜。白票事件

堀光亀は1940年に病没しています。『堀光亀自叙傳』によれば、定年退官したのは1937年春、しかしながら前年の11月には「ついに病床の人となった」と自ら記している、定年までは学内に留まらず、籍のみ置いて、自宅療養していたのかもしれない。

1935年、一橋の派閥争いとして著名な白票事件が起こります。7月の大学教授会において、杉村広蔵の論文『経済哲学の基本問題』への学位授与が、

審査投票により否決されたのです。投票の内訳は総数21、可13、否1、白票7というものでした。学位規定では総数の4分の3以上の賛成が必要だったので、杉村論文はこれを満たしませんでした。

この結果に、当事者の杉村をはじめ助教グループが佐野学長や審査委員の高垣寅次郎ら白票を投じたグループを糾弾する運動が起きたのです。白票とは「不賛成」なのか「棄権」なのか。「棄権」だとすると、大学教授の分際で極めて不謹慎であるとして、世間から非難を受けたのです。杉村はこの学位論文を岩波書店から公刊して是非を世に問いました。

10月、佐野学長は退任。実に高等商業学校時代も含めると22年の長期政権でした。代わって学長に就任したのが、堀と同期の三浦新七です。三浦はこの後もくすぶり続ける肅学運動を終息させようと、堀の専門部主事を罷免します。これで保守派と改新派

Captains 堀 光亀

の対立は収まると考えましたが、堀を支持する13人の教授が連結辞職を訴え、火に油を注ぐ結果となりました。結局、高商OBである時の文部大臣・平生鈆三郎が、保守派の高垣、本間喜一、改新派の杉村の免官によって解決しました。三浦は騒動の責任を取り辞任。上田貞次郎に学長の座を明け渡します。

三宅勇三は『堀光亀自叙傳』を、「恩師堀先生の晩年はまことに気の毒であった。淋しかった。しかし、先生は偉大な教育者であった」と結んでいます。とりわけ専門部卒業生からは慕われたようです。

堀の胸像の除幕式では、当時の専門部主事・上原専禄が追想を述べています。

「堀先生はよく人を叱る人であった。先生の身边にいたもので叱られないものはないだろう。私情を交えないで人を叱ることのできる人は偉い人である」
こう結んでいます。

【堀 光亀略年譜】

- 1876年（明治9年）長崎県の島原の藩士、石川光英の子として生まれる。
- 1895年（明治28年）長崎市立商業学校を卒業、高等商業学校に入学。
- 1898年（明治31年）商工業実況取調べ修学旅行を命じられ、台湾の商業情勢を見聞。
- 1902年（明治35年）東京高等商業学校専攻部卒業、東京高等商業学校講師に就任。
- 1903年（明治36年）英国、ドイツ、米國へ留学、交通業研究に勤しむ。
- 1908年（明治41年）帰国。東京高等商業学校教授に就任、『商業大学必要論』を執筆し、大学昇格の必要性を訴える。専攻部廃止の文部省令に抗議する学生と同窓会による申西事件が起きる。
- 1915年（大正4年）文部省督学官に就任。
- 1920年（大正9年）東京商科大学昇格、同大学教授に就任。
- 1927年（昭和2年）専門部主事に就任。
- 1931年（昭和6年）文部省の東京商科大学予科および専門部の廃止案に反対する学生による籠城事件が起きる。
- 1935年（昭和10年）学位授与審査投票に端を発する白票事件により、専門部主事を罷免される。
- 1937年（昭和12年）東京商科大学退官。
- 1940年（昭和15年）病没。

【出所】

『堀 光亀自叙傳』

（三宅勇三／著 三瀧社／刊 1972年発行）

『日本の近代化と一橋』

（小島慶三／著 如水会／刊 1987年発行）

『一橋大学学制史資料 第一集

（大正九～十二年東京商科大学）』

（一橋大学学園史編集委員会／発行編集 1982年発行）

『一橋籠城事件』

（一橋大学学園史編纂事業委員会

籠城事件史専門委員会／編

籠城事件を偲ぶ会／刊 1982年発行）

『一橋大学百二十年史—Captain of Industryをこえて—』

（一橋大学学園史刊行委員会／編

一橋大学／刊 1995年発行）

※文中敬称略

※引用中の旧仮名づかい、旧漢字は、現代表記へ改め、

カタカナの送り仮名はひらがなへ改めました。

水岡不二雄

江戸版本の世界

日本は江戸時代の幕開けとともに出版が始まった。もちろんそれ以前にも印刷の技術は遠く奈良時代からあり、百万塔陀羅尼経が世界最古の印刷物として知られていたが（最近、それより古いお経が韓国で見つかり、出版物最古の座をあげわたしている）、営利を目的とした出版が定着したのが江戸時代なのである。このことが情報の質・量ともに現代のIT革命にも匹敵する変革を日本の社会にもたらした。

世界に誇れる日本の読書文化

私の専門は江戸文学だが、このことを抜きにして江戸の文学を語ることとはできない。文学が印刷物を通して世に広まる、あるいは出版されることを前提に作品が書かれる、さらにこれまでは比較にならないほど多くの

人々が文学作品を享受し、人間を対象化して考える基盤が生まれた時代だからである。そこで研究の対象となる資料は江戸時代に出版された版本になる。そのため全国、さらには海外の研究機関などに本を見に行くことが多いのだが、それとは別に市場に回る版本に、時としてはその一冊で論文が一本書けるほどの重要な資料的価値が存することも珍しくない。こうした版本は神田に行けば上は1千万円クラスのものもある一方、手頃なところでは500円ぐらいで本物を手に入れることができる。文化遺産に匹敵する本を案外簡単に入手することができるのである。これは一つには江戸時代における出版点数が膨大であることに由来している。江戸時代は町人文化が栄えた時代だが、その町人たちが出版物の享受者として少なからぬ割合を占めており、そのことが出版物のジャンルの多様性をもたらし、膨大な出版点数へと繋がっているのである。寺子屋用の教科書・漫画・辞書・絵本・料理本、果ては家相の本等、ありとあらゆるジャン

ルの本が出版されている。かように封建時代に庶民が広く享受者となって出版が行われていた国は他に例を見ない。事実、幕末に日本にやってきた欧米の知識人たちは庶民の女性や子ども

までが本を読んでいることに異口同音に驚嘆している。この事実が日本が世界に誇れることのひとつであろう。

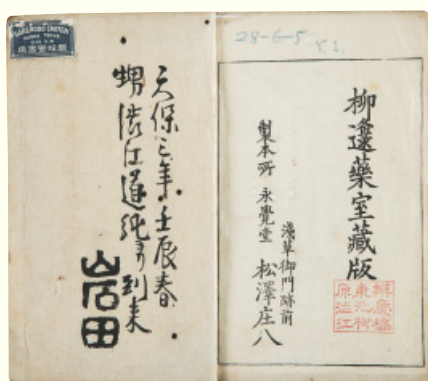
版本獲得には、反射神経が必要

この版本、内容を読むだけでなく、いわば骨董品のようにそのたまたまの雅趣を味わう楽しみもお薦めする。外国人は挿絵も含め、そういう楽しみ方をしている。しかしそれを研究対象としてしまうとやはり楽しむばかりでは済まされない。日頃版本を購入していると本屋から古書目録が送られてくるようになるが、そうした本の購入は競争相手がいいて、注文の電話をするのとたった今売れましたというようなことがよくある。そこで目録が届いたら迅速に目を通し、支払い可能か否かの算段をしてすばやく電話をかける必要がある。そもそも郵便配達時間が場所によって異なることが版本獲得戦の明暗をわける根本的問題としてあり、^{そぐだん}灰関するところによれば配達時間が遅く不利な立場である同業者諸氏は私も含めて一度は郵便局に掛け合ったことがあるようである。しかし配達時間の変更は成功した例を聞かない。かくて一定の時刻になると目録がポストに投函されるか否か、反射神経を研ぎ澄まして待ちかまえる毎日を送るのである。



『ぶんしょう物語』

1671年（寛文11年）刊。仮名草子という娯楽向けの読み物。挿絵は「見返り美人図」で有名な浮世絵師菱川師宣の工房で作成されたもの。



『護痘要法』

1831年（天保2年）刊。森鷗外の『渋江抽斎』の主人公抽斎の生前に唯一刊行された著書。私家版で抽斎の蔵版印（弁慶橋／東元柳／原渋江）が押されているのが珍しい。左面は抽斎の母方の叔父岩田氏の識語で、天保3年に抽斎（道純）に贈呈された旨が書き入れられている。印刷部数は50部ぐらいか。



『菅茶山遺稿』

1828年（文政11年）成立。写本。『菅茶山遺稿』森鷗外の『伊沢蘭軒』の主人公蘭軒の所持していた漢詩人菅茶山の未刊遺稿集。茶山研究資料としての貴重本。左面右下が蘭軒の蔵書印（伊沢氏／酌源堂／図書記）。

Love of Culture

江戸版本の世界



法学研究科教授

柏崎順子

古典に学ぶ

最近注目している古典の中から二冊の本をとりあげてみたい。一冊は、現代の経済統計の古典とみなされるP.I.ボポフ編『1923-24年ソ連国民経済バランス』（ロシア語初版1926年）である。もう一冊は、環境論における不朽の名作と評価されるC.ダーウィン『サンゴ礁の構造と分布 *The structure and distribution of coral reefs*』（原著初版1842年）である。

経済学史上の「英雄時代」

最初の本は、1973年にノーベル経済学賞を受けた故レオンチェフ教授が樹立した産業連関表のベースとなるマトリックス形式統計表のひな形を歴史上初めて具体的に提示している。産業連関表は、一国の財・サービスの生産・分配・利用のフローを一枚のマトリックス表で示す。表の縦には各産業による財の産業別投入が記録されているが、横にみると、各産業の生産した財の産業別利用・配分がわかるようになっていく。中間財の産業間取引は基盤編のマトリックスとなっている。産業連関表は、GDPの精確な測定のためにも、また中間財の投入に着目する経済分析や環境分析にも不可欠な統計となっている。この原型が1926年にソ連で生み出されていたのである。アイデアの一部がソ連で生み出され、

米国で開花・完成し、世界に普及したことに、ロシアの歴史とレオンチェフの個人史が関係している。

1920年代は、ロシア・ソ連の経済学史上の「英雄時代」といわれる。この時期に新政権は、締め付けから一転して、自由化政策をとり、それに対応して、様々な思想をもった人々が社会主義という新しい経済システムの発展を目指した創造的試みを行ったのである。1991年末のソ連崩壊後の20年間は、歴史上画期的であるが、この期間にロシアの経済学にはみればべき創造的成果はなかった。目標となるシステムやビジョンがすべて既製品の後追いだったからである。この事実、この1年間、拙著『ロシア経済の成長と構造』（岩波書店、2011年1月）を執筆するにあたってつくづく考えさせられた。

『国民経済バランス』は計画化という当時の新しい方式の基礎固めのために作成された、「英雄時代」の代表的成果である。レオンチェフは、帝国ロシアの外交官であった父親の任地であるドイツで生誕したが、青少年時期をロシア・ソ連ですごした。『国民経済バランス』の草稿に関する彼の論評は、1925年に統計局機関誌に掲載された。

1920年代末から締め付けが再開し、スターリンの恐怖政治が始まった。『国民経済バランス』も「数字の遊び」だという一片のスターリンの言葉で発展の芽が押しつぶされてしまった（長期循環で著名なコンドラチェフでさえ投獄され、処刑された時代である）。レオンチェフは時を同じくして、ドイツを経て米国に移住し、ハーバード大において独力で米国産業連関表と投入産出分析体系を完成させた。ソ連が産業連関表の作成の後追いを始めたのは、スターリンの死後であった。その時期に『国民経済バランス』の再評価も行われたが、本の復刊はソ連崩壊後であった。2006年に初版刊行80周年を記念する論文がいくつか出版された。私が今になってこの本に改めて注目するのは、帝国時代から現在までのロシア数量経済史（GDP推計）の再編成という経済研究所の大規模プロジェクトのためであるが、断片的な記述や未完成な統計表に歴史の息吹を感じるのである。

科学的方法のエッセンスが凝縮される

さて、ダーウィンの『サンゴ礁』は、いろいろな意味で傑作である。『種の起源』による彼の進化論は誰もが知っている。同じ人物が、小著で、サンゴ礁のおりなす地形の生成・発展・消滅を実証的にあますところなく明らかにしており、これが現在においてもサンゴ礁学の通説として生きていることはあまり知られていない。この本は、帰納と演繹、理論と実証、分析と総合という科学的方法のエッセンスをコンパクトな形で示している点でも画期的だといわれる。素人の私にもこの事実を実感することができる点が嬉しい。

英帝国の軍事的支配のためのビーグル号航海調査の結果がフルに活用されており、現在の沖縄を含めて、モルディブやタヒチや著名な観光名所が地図や本文で網羅されている。航海もダイビング機材もままならない当時によくここまで調査したと感心させられる。軍事研究に有益なので巨額の調査・研究費用がまかなわれたことになる（現在のインターネット技術と同じ）。日本政府が南方（「南侵」）政策との関連で、戦前の一時期にサンゴ礁実態研究に多額の科研費を割いたこともあり、当時の研究成果は今でも重視されている。動物であるサンゴの生態、サンゴ礁が育む美しい生物多様性、地球温暖化からのサンゴの保全は、すぐれて現代的な話題であるが、ダーウィンの『サンゴ礁』の価値は不滅である。私は、ここ数年、副業・趣味で、サンゴ礁保全の環境経済学の研究を行ってきたが、いかんせん本業も忙しく、また能力も不足しているため遅々として進まない。しかし、ダーウィンの古典と自然の生態に親しむ時間は、めまぐるしく動く本業の形而下の世界と異なり、やすらぎタイムである。資源開発や地球環境との関連でロシアの環境問題（ツンドラやチョウザメの保全等）も研究しなければと思うが、南方の環境観察について夢中になってしまう。

Book Review
経済研究所教授
久保庭眞彰



P.I. ボポフ編『1923-24年ソ連国民経済バランス』（ロシア語初版1926年）



C. ダーウィン『サンゴ礁の構造と分布 *The structure and distribution of coral reefs*』（原著初版1842年）

in Otaru

地球の風 地域の風

地域に根ざした地元の会社として
小樽から発信を続ける

古くから港湾都市として発展し、

異国情緒あふれる歴史とロマンの街として知られる小樽。

西條文雪氏は、その地を舞台に

ビジネスにプライベートに地域貢献にと、

ときにはグローバルに考えローカルに行動し、

ときにはローカルに考えグローバルに行動している。

小樽はそれが似合う街だ。

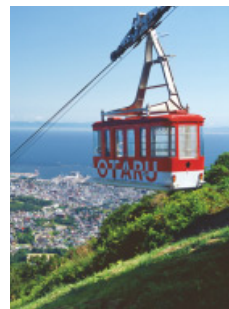


西條産業株式会社

代表取締役

西條文雪氏





建築学科志向だった私が 一橋大学を受けた理由^{わけ}

高校時代は、自分の将来に対してはつきりした意志を持っていたわけではありません。家業が建築関連でしたからとりあえず建築学科に進もうと考えていただけです。ところが、いくつかの大学を受験したところ、希望の大学はすべてアウト。受かったのは、建築学科のない大学1校だけでした。そんな失意のどん底にあった2月に、東京の叔父から「こっちに出てこないか？」と連絡がありました。叔父は辞書や図鑑類を英語に翻訳して大学に納める仕事をしていましたから、大学の事情には詳しかったのです。その叔父が「一橋大学を受ける」と言うのです。「文系の大学ながら理系から流れていく人が多い」というのが理由でした。そのときまでは一橋大学のことはまったく頭がありませんでしたが、英語と数学の配点が高いということがわかり、私は数学が得意だったこともあって、「受けてみようか」と思ったのです。三島由紀夫事件の翌年だったのでよく覚えています。当時の防衛庁のそばにあった予備校に1年間通って勉強しました。

親父の言うとおりに決めるのは シヤクだったが……

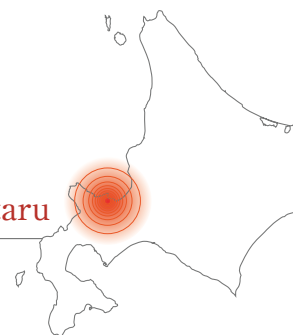
入学式には父親と一緒にきました。クラブの熱心な勧誘があつて、私はヨット部やボート部に興味を持ちました。しかし父は、ゴルフ部に入るように勧めるのです。父には将来のビジネス界でゴルフが役立つという思いがあつたのかもしれませんが。当時ゴルフは贅沢なスポーツで、学生時代からゴルフをやる人は少ない時代でした。

「学生の分際でゴルフをやるなんて……」というのが、一般的な感覚だったのです。しかし、中学校、高校で経験してきた学生の多い



ほかのスポーツとちがい、ゴルフはみんなと同じところからスタートできます。「親父の言うとおりにやるのはシヤクだな」と思いますが、ゴルフなら頑張れば人よりうまくなれると考える人を決意しました。ゴルフの練習は、それこそ毎日やりました。おかげで学生時代にシングルになり、関東学生ゴルフ選手権にも出場しました。同時期の選手には倉本昌弘さんや藤本三郎さんがいます。その後ビジネスに携わるようになって、学生時代にゴルフをやっていた

地球の風 地域の風 in Otaru



てよかったとしみじみと思いました。
ゼミは国際金融論の吉野昌甫ゼミ。夏には千葉の先生の別荘というか、合宿所らしきところでゼミ合宿が行われました。奥様と姪御さんを手伝って、料理をしたのも良い思い出です。

グローバルからローカルへの カルチャーショック！

家業がありましたから、いずれは北海道に戻ることにするという気持ちがなくはありませんでした。小さな抵抗だったのかもしれませんが、就職するなら最低でも5年間は勤めたいと父に宣言して三菱商事に入社しました。2、3年で辞めてしまつては、自分にとって

は良い経験ですみますが、会社には迷惑をかけてしまいます。それに、一人前の仕事ができるようになってなれません。中途半端で終わらせてしまつては、家業を継いでも即戦力どころか役に立ちませんから、自分の中ではとりあえず5年を一区切りとして商社マン生活をスタートさせたのです。

三菱商事では、窯業資材部に配属されて、セメントを中東に輸出したり、



珪砂（シリカサンド）などをオーストラリアから輸入したりしていました。珪砂は収益の高いダイナミックなビジネスでした。三菱商事はマイニング会社を買収しており、製造会社でもありましたので、社内でも珍しい、メーカー機能を持った事業だったのです。珪砂は精選過程を経て純度の高い製品となりますが、さらに配船したり為替を予約したり全てをやりました。そこにダイナミズムがあったのです。世界を相手に100億円単位のビジネスをしているわけですから、仕事が面白くてしょうがなかったですね。残業や休日出勤をはじめ、忙しさが全く苦になりませんでした。そんな日々には満足感を抱いていたわ

けですから、1981年（昭和56年）に会社を辞めるときは後ろ髪を引かれる思いでした。それでも約束ですから、5年で小樽に戻り家業を継いだわけですが、小樽に戻ってきた当初は、かなりカルチャーショックを受けました。世界相手の仕事から地元相手の仕事、仕事のスケールも人との付き合い方も違うわけですから。

私の父は、長年にわたり持病を抱えていましたので、会社の屋台骨は、番頭さんを筆頭に社員たちが支えてくれていました。両親は、私が子供の頃から、父の病氣治療のために東京の大学病院に頻繁に通っていました。その間私と妹は、子供ながらに留守を預かり、ず

いぶんと寂しい思いをしました。しかし、こうした経験があったからこそ、幼い頃から家業や家は自分が守るべきものとして、潜在意識の中に染みついていたのかもしれない。

地域や時代の変化に対応した ビジネスモデルの展開

会社は1950年（昭和25年）創業の木材販売会社で、北海道産の木材を中心にアラスカ材、ロシア材などの輸入木材も扱っていました。こうした材木商がかつての小樽には100軒ぐらひはありましたが、私が戻ったころには20軒ぐらひに減ってしまっていました。



状況変化の兆候は、既に昭和30年代には見えていたようです。そこで弊社は、1963年（昭和38年）に事業拡大を図り、「北海道ハウス」という工事現場用の組み立てハウスを造るようになりました。本州には組み立てハウスの先行メーカーがありましたが、寒さの厳しい北海道仕様のものを扱っているところはありませんでした。北海道の気候に対応した組み立てハウスが必要だということで、ゼネコンから新製品の製造を依頼されたのです。それをきっかけにして事務所や倉庫、木造住宅といった一般建築物も扱うようになっていきました。

現在では木材や建材、住設機器など、建築にからむ全ての資材を扱う商事部門、一般建築物の建築部門、プレハブ部門を大きな柱にして、そのほかに不動産部門を擁するようになっています。

不動産部門はかつての資材置き場の有効活用から始まりました。木材を扱うには丸太や製材を置くためにかなりの広さの敷地が必要でした。しかしだんだん丸太の製材する際の歩留りが悪くなり、丸太から製材品の輸入へ移行し、また在庫をできるだけ抑える時代になってきて、ビジネスモデルが変わってきたのです。そこで、資材置き場だった土地があらまってきました。その有効利用をしようというところから不動産部門のビジネスがスタートしたのです。有力企業に小樽進出を働きかけ、立地の際に建物を建てて貸すという所謂リースバック方式を主体にしていますが、石原裕次郎記念館は土地をお貸ししています。



北海道ハウス

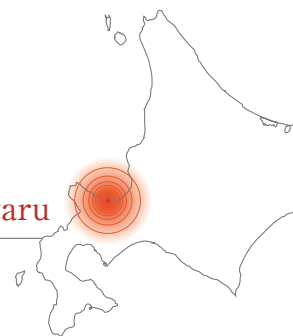


レストラン・ダニーデン



JOYハウス

地球の風 地域の風 in Otaru



小樽ならではのグローバルな活動を行う

小樽市の姉妹都市にニュージーランドのダニーデン市があります。もともと小樽が北海道の輸入港に指定されたことに端を発して、街並みや人口、歴史性などが似ているダニーデン市との交流が始まり、1980年（昭和55年）に姉妹都市協定を締結することになりました。



1984年（昭和59年）開催の小樽博覧会では、ダニーデン市のパビリオンができました。これを見て、ローカルにいながらグロー

バルな活動ができそうな気がしてきました。姉妹都市同士の交流を積極的に行うサポートができそうだと考えたのです。そこで博覧会の終了後に、そのパビリオンを払い下げてもらって、交流窓口としてレストラン・ダニーデンを開店したのです。実際に、それを機に交流も活発化してきました。オールブラックスの選手を招いてパーティを開き、ラグビー教室を開催するなど、スポーツ交流や各種の人的交流を行いました。レストランは開業から11年で閉店しましたが、レストランのシンボルであるアルバトロスは、今もなお本社の前で羽ばたいています。アルバトロスは、ニュージーランドではダニーデ



小樽警察署



シグマハウス

ンだけに住んでいる鳥ですから、レストランの象徴として使っていたのです。

小樽をよりよい街に育てている 郷土愛の強い人たち

地元に帰ると、手を広げれば全てがそのなかに入ってしまうような生活のしやすさがあります。必要なものはすぐ手に入るし、頼み事があれば、相談にのってくれる人が近くにいます。考えをただちに実行に移せるところが魅力です。やるべきことをきちんとやっていけば、リーダーシップを発揮しやすい場所だといえます。最初こそ「一橋出だつてね」と周りから茶化されたり、プレッシャーを感じたこともありましたが、地元を愛する気持ちが全てを吹き飛ばしてくれました。

以前小樽では「運河論争」が持ち上がっていました。慢性化していた交通渋滞を解消するために運河地域を含めた都市計画が決定されたのです。こうして石造りの倉庫群の解体が始まりました。それに抵抗したのが「小樽運河を守る会」で、全国を巻き込んだ運動となりました。もちろん私も運河を残すことに賛成しました。結果的には、小樽運河の半分を残すことになり、石造り倉庫を活用したレストラン等もできて、現在のような景観となったわけです。このように地元で活躍している方たちは、郷土愛に溢れている人ばかりです。この街の美しさは、郷土愛の結晶だといっても過言ではありません。

小樽の街は貿易港としての歴史があるだけ

でなく、古くから豊かな文化や芸術を育んできた街です。こうした環境と市民意識の高さこそ、都市の質を高めるうえで非常に重要なもののなのです。

私自身は、1991年（平成3年）に社長に就任。良い会社づくりを心掛けているうちに、社内外でさまざまな役職が付いてくるようになりました。2002年（平成14年）から3年間小樽市教育委員長をさせていただき、現在は、小樽商工会議所副会頭や小樽ニュージールランド協会会長、伊藤整文学賞の幹事などの役務に就いています。伊藤整は小樽商科大学から一橋大学に行っていますから、小樽とも一橋大学とも関係のある文学者です。ちなみに最初の受賞者は、大江健三郎氏でした。こうした役職が付いてくると一緒に協力して活動する仲間が増えてきますから、地元への貢献をはじめ、やりたいことが一層やりやすくなってきます。地域に根ざした地域のためになる会社として、そして地域になくはない会社として評価を得られるようにこれからも小樽から産業や文化を発信し続けていきます。

思ったとおりによれ！

20代は失敗が許される年代だ

最後に一橋の先輩として後輩たちに言いたいのは、卒業して会社に入ったとしたら、6〜7年は思ったとおりによれということだ

す。20代には、失敗を恐れずにいろいろなことにチャレンジし、自分の可能性を試すことです。失敗したらそれを糧として前に進めばいい。

私は、学生時代にカリフォルニア州立大学サクラメント校で40日間語学を学びました。この経験で、外国人に対する抵抗感がなくなりましたし、英語をしゃべることのおっくうさがなくなりました。私の場合は遊学でしたが、それでも外国人との心理的距離は、十分に縮まりました。そのお陰かどうかはわかりませんが、希望どおりの企業に就職できました。後輩たちにはどんどん外国に出て行ってグローバルな感覚を身につけてほしいですね。

2010年（平成22年）の11月はじめに、小樽で第8回の「東都21の会」という野球の東都大学リーグに所属している21大学OBの交流会がありました。そこで、いろいろ考えさせられたことがありました。他大学のOBが口ぐちに「優秀な大学だ」と言うのが、どういう毛色の大学かわからない」と言うのです。母校に希望することとしては、もっと一橋大学そのものを世の中にアピールしてもらいたいですね。一橋大学には、各界で活躍し、存在感を示している卒業生が大勢います。こういう人たちに協力してもらいアピールしたらどうでしょうか。卒業生としては、「優秀で特色のあるいい大学を出たんだね」と言われれば、素直に嬉しいのです。

地球の風 地域の風 in Otaru

西條文雪

（さいじょう・ふみゆき）

1952年生まれ、1976年一橋大学商学部卒業、三菱商事株式会社入社。1981年同社退社、西條木材産業株式会社入社、常務取締役就任。1991年西條産業株式会社代表取締役就任、現在にいたる。小樽商工会議所副会頭、小樽ニュージールランド協会会長、小樽発明協会会長、伊藤整文学賞幹事等、多様な役職を務める。



西條氏が運営委員長を務める小樽観光大学校が運営する「おたる案内人」のロゴマーク。

同制度は観光の枠を超えた地域活性化を目的とし、地域に貢献する人材の育成と支援を目指している。





杉山学長退任にあたってのメッセージ

受け継ぎ、 そして受け継がれていく 一橋DNA

前一橋大学長

杉山武彦

(在任期間…2004年12月～2010年11月)

マーキュリーに憧れたラグビー少年

学部で4年、留学期間を含めて大学院で6年、そして教員として30年余り。私は40年を超える歳月を一橋大学とともに過ごしてきました。振り返ると、私の人生のなかで一橋大学が占める時間と大きさに改めて深い感慨を覚えます。

とはいえ、一橋大学との出会いは、偶然の要素が強いものでした。高校2年生の世界史の授業でのことです。ギリシア・ローマ時代について授業をしていた先生がローマ神話の商業・学術などの神メルクリウス(英語読みでマーキュリー)の杖のことにふれ、これを校章にしている大学がある、君たちのなかにも憧れている人があるんじゃないかな、と話されたのです。そ



のときの話の面白さとその先生ご自身の魅力が重なり合って、よし一橋大学を目指そうと思ったのでした。

しかし、当時の私はラグビーに熱中するスポーツ少年で、勉強に集中していたとは、お世辞にもいえません。一橋大学に入学したいという思いを胸に抱きながらも、ついつい受験勉強は後回しでした。一年間の浪人生活を予備校に通ってなんとか頑張ったあとで、やっと待望の入学を果たすことができました。

多様性の大切さを感じ取った学部時代

大学時代の4年間は、非常に楽しい日々でした。1年次の後半からは、またラグビーを続けることにしました。午後の授業は練習優先で出られないことが多かったのですが、午前の授業と雨の日の授業にはきちんと出席しました。とくに前期教育の小平分校では、語学や体育の授業をクラスの間と一緒に行うことが、たいへん楽しかったという記憶があります。

なぜ楽しかったのかということですが、授業の内容を理解していたかどうかは別問題で、たぶん、実にいろいろな先生がおられて、しかもその一人ひとりのビヘイビアが自由奔放であることが理由だったと、いまからは思います。ものすごく退屈な授業の先生、奇っ怪な風体の先生、とてもいい加減に見えた先生が、実はものすごく偉い著名な先生方であることをあとで知ったりすることも、楽しい経験でした。

また、いまでも強く印象に残っているのは、ある先生の数学の授業です。講義内容が大学一年生には高度



すぎて、高校で微分・積分をかじった程度の少なくとも私のような学生にはとてもついていけません。何回目かの授業の途中で、勇気ある一人の学生が「まったく分からないのです」と訴えました。暫しの沈思のあとで、先生はこう言われました。「たしかに高校の授業のレベルは下がっています。しかし、だからといって大学の授業のレベルを下げるということは、決してあってはならないことです」と。先生は淡々と講義を講義されました。

初中等教育の在り方や現実が時代とともに変化していることを考慮すれば、現在では学生の理解度への配慮の薄い講義には疑問が呈されるのかもしれませんが。賛否はさておき、当時は厳格型から放任型まで、それぞれの先生の授業のスタイルがきわめて多様だったように思います。その多様な先生や授業のありようを通じて、後の人生で思い当たることになる物事や社会のバランスとか面白さとかを、なんとなく感じ取っていたような気がします。

交通経済学との出会い

父が商社マンだった影響でしょうか、大学3年生の頃まで、私は卒業したら海外で働こうかと漠然と考えていました。しかし、就職を考える時期を迎える頃になって、毎日同じ場所、同じ時間に働く仕事は不向きなのではないかと考えるようになりました。と同時に、大学院で勉強を続けたいという気持ちを持ち始めたのでした。

当時の社会通念では、大学院の博士課程に進学することイコール研究者を目指すことでした。私の場合も同様です。ただ、研究の分野として交通経済を専攻す

るのは、まったく自分自身で予期していないことでした。そこに行き着くまでには若干の紆余曲折があります。留学試験を受けるときは「ビジネス・アドミニストレーション」を専攻するつもりでしたが、その年からフルブライト委員会がその分野を募集対象から外してしまいました。仕方なく名称が似ている「パブリック・アドミニストレーション」に付け焼刃の勉強で受験して、面接では想定外の質問に冷や汗をかいたのを覚えています。結局、留学先のカーネギーメロン大学では公共経済学を勉強して、帰国後に交通経済学の領域に入っていました。

交通経済は、難しいけれども奥の深い研究分野であると思っています。学問領域や組織の改編過程で、多くの大学から交通とか保険などの商業分野の名称が消え去ったことに、少し寂しさを感じています。

二つの言葉、仲間に使われて

歳月を早送りして、最後に、学長としての日々についてお話ししたいと思います。率直に言って、学長就任は私にとって気の重いことでした。歴代の学長は、学問史の系譜に燦然と輝く立派な方々ばかりですから、業績不十分の者がそこに名を連ねることは精神的な苦痛でした。また、国立大学法人化の時期にあたり、大学経営を考えること、リーダーシップの発揮を求められたことにも困惑しました。

自分が学長職の重責に耐えられるか不安でしたが、学内の士気にも影響しますから、元気を出して頑張らなければなりません。そんなときに、某名誉教授が明るい声で「杉山君、選ばれちゃったんだから、やるっきゃないよね」と声をかけてくださり、また、ある先輩は意味不明ですが「あなたのような人を選ぶって



杉山武彦（すぎやま・たけひこ）

1944年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業後、同年同大学大学院商学研究科修士課程入学、1970年同大学院商学研究科修士課程修了、同大学大学院商学研究科博士課程入学。1970年8月、カーネギーメロン大学大学院に1年間留学。1974年一橋大学大学院商学研究科博士課程単位修得退学、成城大学経済学部専任講師。1977年一橋大学商学部専任講師、1980年同大学商学部助教授、1986年同大学商学部教授、1998年同大学商学部長就任。2001年一橋大学副学長就任。2004年12月から2010年11月まで一橋大学長。専門は交通経済学。



学生時代の同級生が定年後に版画を始め、兼松講堂をモチーフにした作品を贈呈してくれました。

うのは、一橋もいいところあるなと思ってね」と言ってくれました。この二つの言葉をもらって、迷いを吹っ切ることができました。

でも、何よりも嬉しかったのは、一橋大学には素晴らしい人たちがたくさんいるということを再認識できたことです。私が繰り返すまでもありませんが、1世紀を超える歴史のなかで一橋大学はさまざまな危機を乗り越えてきました。そうした積み重ねと伝統、一橋人に受け継がれたDNAをいろいろな機会に感じ取りました。

振り返ると、大学改革の流れのなかで一橋大学にも実にたくさん課題や出来事が押し寄せ続けましたが、それらに対して、つねに教職員が一緒に考え、一丸となって対処してきたと思います。自分について言えば、牽引力と判断力のあるたくさんの同僚に、ほとんどの

「仕事」を割り振ってお任せしてきました。経営とは「Getting things done by others」だという経営学者の説明があったように記憶しますが、一橋大学ではそれが自然に実践されてしまうところが、私にとって実に幸運なことでした。

品格のある大学として、 伝統の「上書き保存」を

学長に就任してから、他大学の学長、文部科学省の方々、また産業界の方々、地域の方々、本学の同窓の方々など、新しく人と出会う機会が飛躍的に増えました。そうした方々が例外なく一橋大学に敬意を払い、大学としての品格を認めてくださっていることを感じました。まさに役得といえる体験を通じて、一橋大学

の伝統と底力を痛感しました。

いま一橋大学を去るにあたって思うことは、教育、研究という大学の本分を着実に積み重ねて、大学の品格をしっかり保ち続けてほしいということです。また、学生諸兄弟姉にも、ルールやマナーの遵守と人に対する思いやりなどの社会性を身につけて、品格のあるキャンパスの実現に貢献してほしいと願っています。

一橋大学は大学としての個性を十二分に持っています。これまで、建学の精神を礎に、諸先輩が良き大学であり続けるための努力を積み重ねてこられました。これからも、守るべきものはしっかり守り、変えるべきところは恐れずに変革して、いわば良き伝統の「上書き保存」を続けてほしい、優れたDNAを活かし、そのチャレンジ精神をどこまでも貫いてほしいと思っています。（談）

在学生の保護者

2名 (40,000円)

卒業生のご家族・一般の方

5名 (840,000円)

岡本 操 様
小原康史 様
鈴木昭一 様
中馬英一 様
他1名

企業・法人等

16団体 (77,907,500円)

株式会社イシカワ文明堂 様
インサイト株式会社 様
花王株式会社 様
株式会社カンテック 様
株式会社笹間設備 様
株式会社J M 様
社団法人如水会 様
豊田通商株式会社 様
一橋大学消費生活協同組合 様
明産株式会社 様
明治産業株式会社 様
ヤマト運輸株式会社 様
他4団体

本学役職員

11名 (8,367,051円)

坂下俊樹	様	瀬川 拓	様	永井乙彦	様	林 俊彦	様	三柴文典	様	山崎喜男	様
坂田 茂	様	関口潤一	様	永井邦雄	様	林 祐三	様	水下貴司	様	山崎真理	様
坂本伸三	様	千田峰雄	様	中尾丈夫	様	原田佐和子	様	水野晃志	様	山下 泉	様
相良保彦	様	仙波英躬	様	中川 敦	様	原田昌弘	様	水野晴夫	様	山下真毅	様
酒見多佳夫	様	園部成政	様	中川滋夫	様	春本榮三	様	水戸 洋	様	山田修平	様
笹生洵也	様	曾部英明	様	中川 喬	様	日野岳 稔	様	湊 一郎	様	山田真二	様
佐々木清二	様	染谷松則	様	中川 健	様	姫野州将	様	湊 雄介	様	山田忠璋	様
佐次徹也	様	平 一雄	様	中川寛之	様	百束邦宏	様	南 昇	様	山田慶勝	様
佐藤英次	様	高木邦彦	様	中里克己	様	開野嘉賢	様	南 熹	様	山根言一	様
佐藤 修	様	高久博一	様	中沢永作	様	平野 修	様	南 雅裕	様	山ノ井清蔵	様
佐藤健二	様	高崎 滋	様	中沢秀幸	様	平林英敏	様	南川和義	様	山本勝義	様
佐藤庄八	様	高杉恭一郎	様	中島延忠	様	広瀬丈久	様	嶺元雅俊	様	山本 隆	様
佐藤東彦	様	高瀬 仁	様	永嶋修一	様	廣田明浩	様	三股 宏	様	山本三樹彦	様
佐藤洋史	様	高田 昇	様	中藤 泉	様	福澤信夫	様	宮入武彦	様	横沢奈穂子	様
佐藤文男	様	高野 惇	様	長野隆司	様	福田裕一	様	宮川次夫	様	横田光太郎	様
佐藤正基	様	高橋正一	様	長野 寛	様	福谷健吉	様	宮川 徹	様	横田博久	様
佐藤正幸	様	高橋省吾	様	長野正宏	様	藤井伸也	様	三宅淳一	様	横山一雄	様
佐藤 靖	様	高橋新也	様	中村 明	様	藤井弘教	様	宮崎勝弘	様	横山則男	様
佐藤儀昭	様	高橋伸夫	様	中村哲朗	様	藤方弘道	様	宮崎裕治	様	吉田忠明	様
澤田糸夫	様	高橋義治	様	中村日出男	様	藤田 保	様	宮澤信一	様	吉田輝夫	様
重家俊範	様	高橋力裕	様	中村雅明	様	藤田直也	様	宮澤 保	様	吉田正之	様
品川洋次	様	高峯文世	様	中村良夫	様	藤山昭也	様	宮部正之	様	吉田康宏	様
品田喜久	様	高柳 清	様	中山愛梨	様	藤原国芳	様	宮本博友	様	吉原道博	様
篠原健史	様	田口 威	様	中山憲一	様	二名 實	様	麦野英順	様	吉久達也	様
柴田洋一	様	田口 実	様	中山晴司	様	船井康文	様	向畑哲也	様	吉宮隆彦	様
芝原貴文	様	竹田 章	様	中山裕登	様	古橋秀敏	様	村井 巖	様	依田 繁	様
渋谷昌男	様	武田 豊	様	並木敏夫	様	古山正一郎	様	村上伸一	様	龍崎 豊	様
島崎政家	様	田坂圭子	様	縄田晴明	様	堀 靖彦	様	村上達也	様	渡辺憲厳	様
嶋田康二	様	田所亮子	様	新原徹郎	様	堀口和敏	様	村田彰良	様	渡辺達也	様
寫野昌甫	様	田中正昭	様	西口雄三	様	堀米泰彦	様	村田泰男	様	渡部珠雄	様
清水和海	様	田中好輔	様	西本綱三	様	本間 涼	様	村元直樹	様	渡辺正剛	様
清水隆之	様	田辺俊一	様	西山昭彦	様	前嶋修身	様	森 正樹	様	渡部芳典	様
清水 正	様	谷川文彦	様	新田良昭	様	正木朝男	様	森田瑞男	様	紅椿会 商大専門部S21入学1組(中国語)	様
清水雄司	様	谷本 隆	様	丹羽 普	様	増田正敏	様	森田泰生	様	予科二組耕人会	様
下岡徹也	様	田沼英明	様	野口英次	様	町田 純	様	森本泰史	様	昭和37年悠々会	様
下村 肇	様	種邑 満	様	野地俊典	様	松井正俊	様	諸隈素衛	様	長水会有志(長澤惟恭ゼミナール)	様
白石孝浩	様	玉井 泉	様	野原豊久	様	松尾康弘	様	諸富 滋	様	岡本ゼミ昭和59年卒一同	様
白川年男	様	田村文明	様	野村修平	様	松尾良雄	様	八尾邦彦	様	如水会シアトル支部	様
陣内靖彦	様	長 孝	様	野村親信	様	松熊 健	様	矢尾板健二	様	他69名	
新庄晃洋	様	塚原大輔	様	野村由美	様	松倉博之	様	八木紹夫	様		
末永 明	様	月森晴基	様	野本光一	様	松下 功	様	柳下純一	様		
須賀輝男	様	津田樹己	様	乗松順平	様	松田絵美	様	八島昭雄	様		
菅沼優之	様	津田正道	様	伯野義昭	様	松田賀孝	様	柳沢健二	様		
須釜一光	様	土田晋也	様	橋本英男	様	松永一郎	様	柳澤孝史	様		
菅原隆輔	様	堤 章	様	橋本光彦	様	松永宣夫	様	柳田仁光	様		
杉野幸男	様	常山忠夫	様	蓮 隆詔	様	松原秀樹	様	山内繁勝	様		
鈴木貞男	様	富樫誠太郎	様	長谷川潤治	様	松本忠訓	様	山角瑛人	様		
鈴木孝雄	様	戸上敬愛	様	長谷川芳孝	様	松本理絵	様	山上知裕	様		
鈴木亮一	様	徳島 巖	様	服部 達	様	松吉定男	様	山口 晃	様		
鈴木慎一郎	様	富室 健	様	花川純一郎	様	丸山健二郎	様	山口照二	様		
須田邦之	様	友森 宏	様	花田心弘	様	三浦 憲	様	山口 猛	様		
須見武久	様	直井育夫	様	羽野勝久	様	三浦弘之	様	山口信明	様		
住友公一	様	中 一次	様	馬場正平	様	見崎恒平	様	山口博臣	様		

一橋大学基金へのご協力、 心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2010年11月末現在で、総額約32億4,000万円（入金済分）に達しました（うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ）。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2010年9月1日から2010年11月末日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載しておりません。また、ご寄付者が万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡ください。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に末永く留めさせていただきます。また、30万円以上（法人100万円以上）のご寄付に關しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。

なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。



ご寄付のお申し込みについて

●お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。

●一橋大学基金ホームページより、クレジットカードによるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申込み」メニューからお進みください。

一橋大学基金ホームページ

<http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

如水会会員証カードを お持ちの卒業生の皆様へ 分割ご寄付のご案内

一橋大学基金では（社）如水会と連携し、如水会会員証カードによる分割ご寄付の受け付けをしております。

お申し込みいただきますと、如水会会員証カードから定期的に自動払い込みにてご寄付を頂戴することとなり、お振込の手間を省くことができます。

また、ご寄付の回数は、年1回（2月または8月）と年2回（2月および8月）よりお選びいただけます。如水会会員証カードをお持ちの卒業生の方はぜひご検討ください。

詳しくは、ホームページをご参照いただくか、下記までお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

一橋大学基金事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL：042-580-8888

FAX：042-580-8889

E-mail：gen-kj.g@dm.hit-u.ac.jp

【ご寄付者ご芳名】 ※五十音順に掲載させていただきます。

卒業生

561名・9団体（79,848,380円）

ご寄付金額（累計）

100万円以上

25名・2団体

50万円以上
100万円未満

11名・1団体

50万円未満

525名・6団体

青木俊樹 様

秋元 茂 様

阿部周一 様

天野文彦 様

和泉信一 様

上田 實 様

江崎正道 様

遠藤象三 様

岡村四郎 様

落合正令 様

河西利信 様

加藤静富 様

加藤武雄 様

栗田克彦 様

崔 文浩 様

戴 憲明 様

高木昭治 様

西田研志 様

古川喜英雄 様

松木浩一 様

松島知次 様

三木谷浩史 様

宮部義一 様

茂木賢三郎 様

如水会 大阪支部 様

中村忠ゼミ「中村会」 様

他1名

浅井英一 様

伊藤和彦 様

尾崎昭雄 様

五味 薫 様

坂元昭宏 様

佐々木 武 様

佐藤義明 様

宮内正敬 様

山田昌弘 様

珍部千裕 様

昭和51年卒業（47年入学）

同期会有志一同 様

他1名

相澤紘史 様

青木幸一 様

青木亨郎 様

赤羽治彦 様

秋山武夫 様

芥川 淳 様

浅井 嵩 様

朝倉俊明 様

浅沼省吾 様

朝日良次 様

東 繁彦 様

麻生 健 様

足立幸平 様

天野賢一 様

新井康夫 様

荒木 健 様

有田 博 様

安間 伸 様

飯田 仁 様

飯高忠幸 様

池田 勝 様

去来川信綱 様

石井勝博 様

石井康裕 様

石井靖幸 様

石上栄一 様

石川勝美 様

石川 茂 様

石崎佑作 様

井下 雄 様

石橋輝明 様

井関直彦 様

磯田 卓 様

井田篤志 様

板倉 寛 様

市川 亨 様

伊藤克巳 様

井藤智将 様

伊藤久雄 様

伊藤弘道 様

伊藤浩義 様

稲吉孝昭 様

井上 紘 様

庵原義文 様

今村俊一 様

岩越健一 様

植木俊哉 様

植田真弘 様

牛込達彦 様

確井太吉 様

宇田川 靖 様

鷗戸毅彦 様

宇野二郎 様

宇野敏郎 様

梅田弘美 様

浦野忠之 様

江口栄治 様

江崎 丈 様

江藤隆吉 様

江原 潤 様

海老名 元 様

大沢 稔 様

大島 哲 様

大庭雅志 様

大平 泰 様

大淵健太郎 様

大湊 敏 様

岡崎龍也 様

岡崎祐一 様

岡田和幸 様

岡田伸一郎 様

岡田哲郎 様

岡田八郎 様

岡田康司 様

岡寺 昭 様

岡野理一郎 様

岡本順治 様

岡本祥三 様

小川 保 様

小川雅弘 様

奥山 賢 様

小笹 彰 様

小澤 哲 様

織田邦利 様

小野浩太郎 様

小野俊彦 様

尾上達郎 様

小野寺孝夫 様

柿添猪三郎 様

嶋田春久 様

鹿子島 俊 様

籠橋寛典 様

鹿島 耕 様

榎本 敬 様

柏田洋征 様

片岡 誠 様

勝田栄辰 様

勝田 衛 様

勝亦新一 様

加藤金彦 様

加藤昇司 様

加藤孝雄 様

加藤 卓 様

加藤輝昭 様

加藤嘉貞 様

鐘ヶ江倫彦 様

上加世田 策 様

上久保 齐 様

神山雄司 様

歌門正師 様

唐津智行 様

河合直彦 様

河上 圭 様

川上達郎 様

川上元康 様

川口元彦 様

川崎喬史 様

川崎益功 様

川添能夫 様

河野慎一 様

河原将典 様

河村 浩 様

河本光広 様

神原信行 様

菊地義治 様

北澤健一 様

木田橋直人 様

北畠能房 様

北村順作 様

衣川元知 様

君島 功 様

草野祥一 様

久保東彦 様

藏方 滋 様

栗原昭文 様

栗又俊二 様

黒川 亮 様

桑澤佳子 様

下條泰利 様

郷 武 様

高坂昌明 様

甲田小百合 様

鴻巣慶子 様

肥沼国夫 様

小谷邦夫 様

小段義宗 様

古茶喜久寿 様

小林純一 様

小林千果 様

小松 哲 様

小宮光明 様

小村充広 様

近藤三郎 様

齋藤 博 様

齋藤裕信 様

齋藤真樹子 様

酒井伴晃 様

酒井雅子 様

酒井康道 様

一橋大学創立135周年・国立移転80周年記念事業

記念式典に引き続き 記念コンサート 記念講演会を開催しました

一橋大学では創立135周年、国立移転80周年を記念し、3つの事業を行いました。1つ目は9月25日に開催した記念式典および祝賀会です。国立市長の関口博氏、文部科学省大臣官房審議官小松親次郎氏、同窓会組織社団法人如水会理事長・住友電気工業株式会社社長松本正義氏など、本学に関係の深い要人を迎え、お祝いと激励の言葉をいただきました。また、本学が国立に



「国立シンフォニカー」による創立記念コンサート。

一橋大学創立135周年・国立移転80周年記念コンサート

一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ「国立シンフォニカー」 創立記念コンサート

開催日：2010年10月24日（日）

指揮者：宮城敬雄

ゲストピアニスト：オリビエ・トリエンドル

演奏曲：ブラームス「大学祝典」序曲 op.80

シューマン ピアノ協奏曲 イ短調 op.54

ブラームス 交響曲第1番 ハ短調 op.68



創立記念コンサートで指揮をとる
宮城敬雄氏。



135th Anniversary
80 years in Kunitachi

移転してきた1930年当時に記録された貴重映像が上映されました。

記念事業2つ目は、10月24日に開催された一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ「国立シンフォニカー」による演奏会です。この演奏会は、世界でも稀に見る大学の講堂を活動拠点にするレジデント（専属）オーケストラ、「国立シンフォニカー」の創立記念コンサートでもありました。指揮者であり、オーケストラの主宰者でもある宮城敬雄氏は本学出身者であり、50歳から指揮を学び、音楽家としてプロ・デビューを果たしました。コンサートはブラームスの「大学祝典」序曲から始まり、ゲスト演奏者としてドイツから迎えたピアノリスト、オリビエ・トリエンドル氏との共演によるシューマンのピアノ協奏曲、そしてブラームスの交響曲第一番へと続きました。一般の方々にも開放された本コンサートには約900名の観客が集い、素晴らしい演奏に兼松講堂は割れんばかりの拍手に包まれました。

3つ目の事業は、11月29日に如水会館で開催された記念講演会です。「変動する世界経済と日本企業の革新」をテーマに、産業界の代表として、本学同窓会理事長であり住友電気工業株式会社社長でもある松本正義氏と、本学の代表として、商学研究科の伊藤邦雄教授が講演しました。



記念講演会で講演する
住友電気工業株式会社社長の松本正義氏。



記念講演会でのディスカッション及び質疑応答。
左端は司会を務めた商学研究科の山下裕子准教授。



記念講演会で講演する
商学研究科の伊藤邦雄教授。

一橋大学創立135周年・国立移転80周年記念講演会

テーマ：変動する世界経済と日本企業の革新

開催日：2010年11月29日（月）

会場：如水会館2階スターホール

開会挨拶：一橋大学理事・副学長 山内 進

講演：「日本企業、再飛躍の条件—グローバル競争に打ち勝つ知恵と戦略—」

一橋大学商学研究科教授 伊藤邦雄

「パラダイムシフトとグローバル化する企業経営—変化への対応と事業精神—」

住友電気工業株式会社社長 松本正義氏

ディスカッション及び質疑応答：

住友電気工業株式会社社長 松本正義氏

一橋大学商学研究科教授 伊藤邦雄

司会／一橋大学商学研究科准教授 山下裕子

閉会挨拶：一橋大学長 杉山武彦



第7回

一橋大学関西アカデミア シンポジウム

テーマ

「東アジアの成長と地域金融・通貨協力」

日時：2011年2月19日(土) 13:30～(13:00 開場)

会場：大阪国際会議場

主催：一橋大学

協賛：大阪ガス株式会社 オムロン株式会社 関西電力株式会社 小林製薬株式会社
 塩野義製薬株式会社 住友生命保険相互会社 住友電気工業株式会社
 株式会社富士通マーケティング 株式会社村田製作所(順不同)

■ プログラム

開会挨拶：一橋大学長 山内 進

問題提起：一橋大学理事・副学長 小川英治

基調講演：「アジアの成長の課題と金融フローの姿」
 国際協力銀行経営責任者 渡辺博史

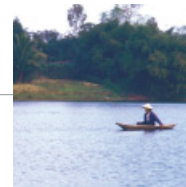
講演：「アジア債券市場と日本の役割」
 一橋大学大学院経済学研究科教授 奥田英信
 「東アジアの成長構造と金融の課題」
 神戸大学大学院国際協力研究科教授 三重野文晴
 「東アジアにおける頑健な地域通貨協力に向けて」
 一橋大学理事・副学長 小川英治

パネル・ディスカッション：

《司会》一橋大学大学院経済学研究科教授 佐藤 宏
 《パネリスト》国際協力銀行経営責任者 渡辺博史
 神戸大学大学院国際協力研究科教授 三重野文晴
 一橋大学理事・副学長 小川英治
 一橋大学大学院経済学研究科教授 奥田英信

閉会挨拶：一橋大学長 山内 進
 (司会 一橋大学大学院商学研究科教授 山崎秀記)

《お申込み先》 *参加無料・先着200名
 参加希望者は、氏名・職業・連絡先を明記の上、
 2月10日(木)までに、EメールまたはFAXでお申し込みください。
 Eメール：res-sr.g@dm.hit-u.ac.jp
 FAX：042-580-8050
 ※詳細は大学ウェブサイトをご覧ください。
<http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2010/1224.html>
 《お問い合わせ先》 一橋大学総務部研究・社会連携推進課
 TEL：042-580-8058



135th Anniversary
 80 years in Kunitachi

〈編集・発行〉
一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉
副学長（財務、社会連携、企画・評価、情報化担当） 小川英治

〈編集長〉
言語社会研究科教授 坂井洋史

〈編集部員〉
商学研究科准教授 松井 剛
経済学研究科教授 水岡不二雄
法学研究科教授 屋敷二郎
社会学研究科教授 阪西紀子
国際企業戦略研究科准教授 大上慎吾
経済研究所教授 青木玲子

〈外部編集部員〉
有限会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉
図書印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉
一橋大学企画・広報室広報担当
〒186-8601 東京都国立市中2-1
Tel : 042-580-8032 Fax : 042-580-8016
http://www.hit-u.ac.jp/
koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。
一橋大学企画・広報室広報担当
koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の無断転載はお断りします。

お詫びと訂正

前号〔HQ秋号 Vol.28〕「一橋の女性たち」の記述に、一部誤りがありました。
取材にご協力いただいた先生をはじめ、関係者の方々に
お詫びいたしますとともに、訂正を以下に明記いたします。
●33ページ下段 後ろから3行目
【誤】阿部フェローシップ
【正】安倍フェローシップ

●広告掲載お問い合わせ先
一橋大学企画・広報室広報担当
TEL : 042-580-8032

編集部から

前号「個性は主張する」に登場した伊藤神父は、阿部謹也ゼミでの私の1年先輩である。司祭叙階式での晴れ姿を拝見すべく、駆けつけたゼミOB・OGたちは、あの広い東京カテドラル一杯の会衆を見て圧倒されたのだった。新司祭3人分の関係者とはいえ、椅子に座っている人よりも立っている人のほうがはるかに多く、しかもすごい人口密度！ 聖職者となることは教会と結婚することであると頭ではわかっていたが、こういうことなのか、と納得した。新司祭ごとの受付が設置されていたり、後日叙階式の写真入りご挨拶状が届いたり、というのも結婚式に似ている。伊藤神父は、神学生だった時に阿部先生にお会いし、その折の最後のメッセージについて記事中で語っている。その場に居合わせた別のゼミテンの記憶では、最後に聞いた阿部先生の言葉は次のとおりである。「奇跡は起こるんです。伊藤が司祭になるくらいだからね」。(N.B.)

第2回 東京工業大学・一橋大学合同移動講座開催報告

2010年12月11日(土)、 第2回東京工業大学・一橋大学合同移動講座が 「科学技術の将来と関西経済」をテーマに 神戸で開催されました。

基調講演1：「科学と人類社会—科学者よ、誇りを持とう—」

特別
ゲスト 独立行政法人理化学研究所理事長
2001年ノーベル化学賞受賞者
野依良治氏

基調講演2：「ものづくり力の更なる強化に向けた
国家戦略と三菱電機の取組み」

特別
ゲスト 三菱電機株式会社取締役会長
下村節宏氏

オープニングアドレス：

社団法人蔵前工業会理事長
株式会社日立製作所相談役
庄山悦彦氏

講演1：「レーザー誕生から50年—ものづくりから人づくりへ—」
国立大学法人東京工業大学学長
伊賀健一氏

講演2：「実学としての社会科学—その歴史と精神—」
国立大学法人一橋大学学長
山内 進

クロージングリマークス：

社団法人如水会理事長
住友電気工業株式会社社長
松本正義氏

本学法学研究科教授水野忠恒氏が 「平成22年度秋の紫綬褒章」を受章

水野忠恒教授は、多年にわたり、「租税法研究」の分野において研究に従事され、優れた業績を上げたことにより、学術や芸術に関して事績の著しい方に授与される紫綬褒章を2010（平成22）年11月3日付けで受章されました。

本学では、1971（昭和46）年度から15人の教員が在職中または退職後に紫綬褒章を受章しており、水野教授は16人目の受章者となります。

過去5年の受章は、2005（平成17）年11月に商学研究科の伊丹敬之教授（当時）が、2009（平成21）年11月に経済研究所寺西重郎名誉教授が、2010（平成22）年4月に経済研究所斎藤修名誉教授が受章されています。



Hitotsubashi Quarterly

冬号

January 2011 Vol.29 編集・発行／一橋大学HQ編集部

〒186-8601 東京都国立市中2-1 Tel:042-580-8032 <http://www.hit-u.ac.jp/> koho1284@dm.hit-u.ac.jp

ISSN 1881-3887



Hitotsubashi Quarterly

冬号 January 2011 Vol.29